
バトルシップスよもやま話

桃山忠海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バトルシップスよもやま話

【Nコード】

N7324Y

【作者名】

桃山忠海

【あらすじ】

本編はこちら↓<http://ncode.syosetu.com/n2934r/>

ここに掲載される文章は本編である「大日本リーグ大連戦記」の続編であり番外編であり設定資料集であります。主役チームである大連バトルシップスや所属選手について、多角的な記述によって世界観をより明確に提示していきたいと思っております。内容はあってないようなもので気軽にどうぞ。

大連オフニュース11月（適宜更新）

11月15日 ノーリー引退会見 「肉体の限界」

15日、大連市内でクラウド・ノーリー外野手（36）の引退会見が行われた。引退理由に関して、ノーリー外野手は「プロとして必要なパフォーマンスを見せるために努力してきたが、肉体がついていかなかった。今季2度目の怪我で気持ちが切れたと言うか、もう限界だと感じた」と語った。また「9月には球団に（引退の意向を）伝えていたが、選手たちには余計な事に気をわずらわせたくなかったので言わなかった」と、チームを第一に考える姿勢は最後まで変わらなかった。

ノーリー外野手は27歳で大連に入団。バントなどの小技も巧みにこなすバッティングと高い守備力でチームを支えてきた。今季は怪我の影響もあり46試合出場で打率・241と低迷したが、内外野をそつなくこなすユーティリティー性と厚い人望でチームの東洋一に貢献した。その温厚な性格と徹底したプロ意識は知られており、柳中平、星渡など彼を慕う選手は多い。

同時に、来季からは二軍の守備コーチに就任すると発表され「来季からは新たな役割となるが、選手たちには自分が野球で得たもの全てを伝えていきたい。技術もそうだが、心構えと言った部分もね」と抱負を語った。この会見の後、現在沖縄で行われている大連の秋季キャンプに合流するために空港へ向かった。

11月16日 原、剣持らに戦力外通告

大連は16日、原克馬投手（34）、剣持純平外野手（30）ら8選手に戦力外を通告したと発表した。原投手は先発もリリーフも器用にこなす右腕。通算263試合に登板して9勝11敗防御率4.21だが、今季は3試合で防御率16.88と結果を残せなかった。原投手は「この成績では仕方がない。でも秋頃から体が動くようになってきた。拾ってくれる球団があればそこで頑張るだけです」と24日のトライアウト受験に前向きな姿勢を見せた。戦力外通告された8選手は以下の通り。

原克馬投手（34）
小林孝司投手（25）
李衛孝投手（28）
岡田正見投手（27）
鈴木常惟捕手（29）
王長映内野手（24）
陳久利内野手（23）
剣持純平外野手（30）

11月18日 テスト入団で2外国人獲得

大連は18日、テスト生として秋季キャンプに参加中のケビン・グレスコ投手（23）とレニー・ウィッティア外野手（21）の両選手を獲得したと発表した。グレスコ投手は右投右打180cm87kgで重いストレートが武器、ウィッティア外野手は左投左打189cm76kgで身体能力の高さが魅力。いずれもプロ経験がなく、育成枠として入団する模様。

11月23日 張尊、クリーニング手術を受ける

大連の張尊投手（37）が内視鏡による右ひじのクリーニング手術を行うと23日に発表された。今季10勝を上げてチームの東洋一に貢献した張投手だが5年前に手術したひじの状態は万全といえず、特に今シーズン終盤は痛みをこまかしながら投げていたという。張投手は「色々考えたが万全の状態で行きたいので手術を決断した」と球団を通してコメント。来季の開幕は微妙となるが、連覇を見据えた上でより状態を高めてチームに合流する構えだ。

11月25日 秋季キャンプ打ち上げ

25日、沖縄で行われていた大連の秋季キャンプは全日程を終了した。今日の練習メニューはランニングやストレッチ中心の比較的軽いもの。午前中に全ての日程を終えると、星渡外野手が音頭をとっての三本締めでキャンプを終了した。劉監督は「投手では譚秋雲、王貞成あたりが来季は先発陣に割って入りそう。野手では太刀川や李健太郎がいい打球を飛ばしていた。うちはまだ構成が固まったチームじゃない。こういう場所でどんどんアピールすればチャンスが巡ってくるのだから、選手たちは大事にしてほしいね」と総括した。

11月26日 英気養う温泉キャンプ終了

26日、大連恒例の温泉キャンプが終了し、参加した選手たちは

飛行機で大連に戻った。温泉キャンプとは、その年に活躍した選手たちが瀬戸内海に浮かぶ小島の小中島温泉で今季の疲れを癒して、来季への英気を養う事を目的としている。主に投手が参加するが、野手が加わる事もある。

メンバーは吉野大吾、瑞穂智幸、趙雅憲、黄直哉、野藤秀親、小松原泰誠、比山仁の各投手に清水尚起、金重男の両捕手、そして林葉輔外野手の計10名。18日から約1週間、温泉を利用したりハビリメニューやゴルフなどの軽い運動で心地よい汗を流した。

11月29日 背番号変更 棚橋29から10へ

大連は29日、来季から棚橋和隆内野手（24）らの背番号を変更すると発表した。今季ショートのレギュラーを掴み打率・292本塁打16打点79とブレイクした棚橋内野手は29から10に変更。棚橋内野手は「29に愛着はあったが背番号が小さくなったという事はそれだけ評価してもらったという事。これからは背番号10は棚橋と定着するように頑張りたい」とコメントした。また、今季途中に加入して一軍に定着したヴィクトル・I・ドラグノフ内野手（25）は37から5に、河剛紀外野手（24）は10から30に変更した。

11月30日 国際トレードでアーウィン投手獲得

大連は30日、すでに今季限りでの退団が決まっていたカルロス・アンジェロ外野手（28）とアメリカ・ウイスコンシンに所属する

ダニエル・アーウィン投手（27）との国際交換トレードが成立したと発表した。アーウィン投手は身長188cm体重89kg右投右打で、常時150キロを超えるストリートが武器。今季は主にリリーフとして33試合に登板、3勝1敗で防御率は3・86だった。球団ではセットアッパーとして期待している。

同日、アンジェロ外野手が記者会見を開き「来季の所属が決まっ
てほっとしている。今年はアメリカとは違う野球文化を学ぶ事が出
来てとても有意義だった。またいつか大連に帰って来たい」とコメ
ント。拔群のパンチ力と練習熱心さでチームに新風を巻き起こした
助っ人は大連の歴史にその名を刻み、去っていった。

また、今季限りで大連を退団した原克馬投手（34）を吉林が、
李衛孝投手（28）をチチハルが、鈴木常惟捕手（29）を京城が
それぞれ獲得するとこの日までに発表された。

大連オフニュース12月(適宜更新)

12月2日 主力選手交換 近堂・北と呉清元・草原がトレード

大連の近堂貴久内野手(29)北甲大投手(32)と台南の呉清元外野手(33)草原輝喜投手(24)の交換トレードが成立したと2日、両球団から発表された。二遊間と中継ぎの強化を目指していた台南と安定した長打力のある野手を求めていた大連の利害が一致した。

近堂内野手は大洋大から大連に入団して1年目からセカンドの定位置を確保。高い打撃力でも知られ、今季は規定打席に届かなかったものの打率・276本塁打8打点37の成績を上げ、チームの東洋一に貢献した。北投手はバランスのいいリリーフで、今季は10試合に登板して防御率3.18で勝敗はなし。大日本シリーズでも登板した。

交換相手の呉清元外野手は台南第三高から地元である台南に入団。パンチ力のある打撃と勝負強さで知られ、今季は打率・248本塁打19打点74だった。大連ではアンジェロが抜けたレフトの後釜として起用する方針。草原投手は左腕から繰り出される伸びやかなストレートが武器。今季は2試合登板で2敗と結果を残せなかったが潜在能力は確か。大連では先発候補として期待している。

同日、大連の球団事務所で行われた記者会見において近堂内野手は「大連で今季東洋一になったのは野球人生としてはいい区切りだと思う。自分の売りである打撃と守備で台南でも力になりたい」とコメント。北投手は「大連は本当に素晴らしいチームでしたが、自分にとっては新たなチャンスなので今はワクワクしている。台南で

は自分が投げる事で勝利に貢献したい」と語った。

12月4日 白・染が武者修行へ 山田は復帰

4日、大連の白巖承投手（20）と染恒規外野手（19）が、来季から遼東リーグに所属する営口メカニカルローズに移籍すると発表された。営口球団は大連と親密な関係で結ばれており、大上徳博内野手（24）などもかつて在籍していた。同時に今季営口でプレーした山田秀雄内野手（20）が大連に復帰すると発表された。

12月5日 高遼二が光州へ移籍

大連は5日、高遼二外野手（27）が光州へ移籍すると発表した。高外野手は今季23試合出場で打率・174に終わったが、高い守備力に定評がある。外野手の高齢化が顕著な光州が高外野手を求め、大連が了承した形。高外野手は「昨日初めて聞いた話だったので少し驚いたが、新たな挑戦にはいい機会だと思う。光州には小金井大智さんや朴芳一さんなど実力のある外野手が多いので、多くの事を学びたい。」とコメントした。

12月6日 戦力外の3選手獲得

大連は6日、前広島の前島聡史投手（32）、元名古屋の樋渡和泉投手（22）、前釜山の姜順国内野手（26）の3選手を獲得し

たと発表した。早島投手は球威のあるストレートとスライダー、パームなど多彩な変化球が武器の中継ぎタイプ。樋渡投手は怪我の影響で昨年退団し、今年は無所属でリハビリとトレーニングを続けてカムバックした右腕で身体能力が高い好素材。姜内野手は怪我が多いものの俊足が武器の実力派。

12月12日 登録名変更 フェリックス→アマラウ

大連は12日、フェリックス・アマラウ内野手（20）の登録名をフェリックスからアマラウに変更すると発表した。アマラウ内野手は今季1年目ながら15試合に出場して打率・313と活躍した。同郷の先輩パウロにちなんで名前を登録名としていたが、来季以降はパウロの強い影響下から独立してさらなる上昇気流を生み出した。い。

12月21日 新外国人ベロス内野手獲得

大連は21日、新外国人としてアメリカ・サンアントニオからアト・ベロス内野手（32）を獲得したと発表した。ベロス内野手は右投右打で、178cm95kgのがっしりした体格が特徴。器用さとパンチ力を併せ持つバッティングに加えて内野ならどこでも守れるという万能性の高い守備力に定評がある。大連は来季のセカンド候補として期待している。

バトルシップスについて

結成は西暦1983年。親会社は瀬戸内海に本拠地を置く造船会社から成長し、今では兵器からレジャー施設まで手がける巨大企業となった幸波グループ。グループとはいわば新興の財閥である。グループの創始者であり、チームの初代オーナーである村上好寿氏はすでにオーナーを退いて隠居生活を送っているが、現在85歳で未だに健在である。

グループのルーツである幸波造船の創立は1949年。すでに日米戦争は回避され、アジアの共産化を食い止めるべく日米の関係改善が図られていた時期である。日中戦争が明確な決着がつかないまま終戦となったのは1945年。しかし40年代の終わりや50年代は内戦を制した中国共産党が満洲に幾度となく侵攻して来た時代でもある。そのたびに満洲軍や日本軍が迎え撃った。この一連の戦いが造船業にとっては特需となり、幸波造船もその波に乗って急成長を遂げた。

60年代に入ると中国と満洲との間の衝突が少なくなった。平和になった満洲では高度経済成長が始まった。それまでの間に瀬戸内海のみならず大連を中心とする満洲にもコネクションを得た幸波造船は軍事中心から貿易に用いる商船も盛んに建造するようになった。また、この頃から経営の多角化にも着手し、これに成功させる。この時点で幸波グループは野球チームを持つてはいなかったが、村上はこの頃からプロスポーツに興味を示していたようだ。

球界に激震が走ったのは1972年の事である。その数年前から台北、台南にプロ野球チームを発足させようという動きが本格化していた。しかし台湾はいわゆる外地に存在する。参加させるのは時

期尚早であるという意見とすでに期は熟したという意見を持つ球団とで対立し、アメリカに倣ったの発展的解消と称して2リーグに分裂した。この際、球団が急激に増えるとレベルの低下やモラルの混乱が懸念されるとして「今後10年間は新規球団を加入させない」という取り決めがなされたというが、その10年が過ぎる前から朝鮮半島や満洲にも球団を設立させようという動きは盛んになっていた。

1975年、村上は中央リーグの代表である三ツ木謙蔵から「新球団設立についての相談」を受けたという。村上は大連を本拠地に置く社会人球団のいくつかを吸収してその時に備えた。そして1982年の暮れ、平壤・光州・大連・新京を本拠地とする4球団が中央リーグに加入すると発表された。1983年1月9日に大連バートルシップスの結団式が行われ、その年からペナントレースに参加した。これ以降は大陸における新球団が次々と誕生して今や全28球団という大所帯となったのだが、その先鞭をつけたのが大連であったと言えるだろう。

準備期間の長さが功を奏して初期は何度もカンファレンス優勝を果たしたが、大陸と日本列島のレベル差が大きかったため大日本シリーズを制する事はなかった。チームが増加していくにつれ、カンファレンス内においても中堅クラスまで落ち着いていった。前回の優勝は1999年であった。ここ数年は選手育成に力を入れており、現監督である劉瑞生は就任2年目にして通算6回目の優勝、そして東洋最強のチームにまで登りつめた。本拠地は大連スタジアム。開場は2006年、両翼101m中堅124mで内外野総天然芝のボールパークである。

ユニフォームはチームカラーである紫、水色、金色が用いられている。ホーム用はアンダーシャツ、ストッキングが紫。襟元、肩、

袖口に水色のラインがかかっている。胸のロゴマークは金色に縁取られた紫の字でチームの名称であるBATTLESHIPと書かれている。SHIPの両端となるSの字が他より大きく書かれ、HIPは2つのSの間に少し小さく書かれている。HIPの上、両端のS字の間にHIPより小さい文字でBATTLEと書かれている。文字の下部分には水色の細いラインが3本添えられている。帽子は地の色が紫で、水色で大連の頭文字を意味するDと書かれている。背番号はロゴと同じ色合いで、胸のロゴの左下にも書かれている。

ビジター用は、上半身全体が水色で、左胸の部分に大連バトルシッパスを略したDBSという3つのアルファベットをひとつにまとめたような記号が書かれている。アンダーシャツやストッキングは紫。帽子はひさしのみ紫で水色がベースの色となっている。ホームとは逆に紫でDと書かれている。そしてサードユニフォームも存在する。これは1リーグ時代を思わせる白を基調とするシンプルなデザインで、帽子も白色に紫のひさしという色合い。胸の文字は紫単色でDALIANと書かれている。袖口や首回りから前立てに紫のラインが入っている。また、サードユニフォームには背中に選手名が書かれていない。

球団旗は白地に上下に紫のライン、中央に野球ボールをかたどったエンブレムが描かれている。ボールにはビジターユニフォームのものと同じDBSをまとめたマークが描かれている。ボールには水色の外周があり、そこには金色の文字で「DALIAN BATTLESHIP since1983」と書かれている。マスコットはスナメリをモチーフにしたバルシスくん。背番号は864番。また、ファンの少年少女から毎年「クルーボーイ」「クルーガール」が選出され、応援に駆けつけてくれる。チアやホームランガールといったものではなく純然たるマスコットキャラクターである。

リアルレポート トライアウト

もはや小説とは一切関係ないお話をします。内容は昨日の事です。2011年11月24日の朝、私は大阪のカプセルホテルから神戸に向かいました。早起きが苦手だし電車の乗り継ぎはもっと苦手なので、金をかけて余裕を買う事にしましたのです。そしてその目的とは、グリーンスタジアム神戸と言ったほうが良いと思われる球場にて行われる12球団合同トライアウトを見物する事です。

梅田駅や三宮駅では通勤途中のスーツが黒い列を作っていました。神戸市営地下鉄にはそういったタイプの人物はそれほど多くありませんでした。地下鉄が地上に顔を出して総合運動公園駅に。大体20分といったところでしょうか。この駅で同じ車両からごっそりと人が抜けました。自分含めて、暇な人間は案外多いものです。駅から球場まではまさに目と鼻の先といった所でした。

時は午前9時をほんの少し過ぎたぐらいで、まだ開門していませんでしたがすでに列が出来ていました。見回すと、横浜のキャップを被った老人、トラッキーのレジャーシートなどが目に付きました。周辺の列構成員のお話を聞くと、横浜から夜行バスで神戸まできた女性などもいたようです。なんという熱意。確か2年前、甲子園でトライアウトがあったときに行きたかったけど雨だからやっぱやめたとか言い出すどこぞのヘタレとは根性からして違います。

球場の寒さについて、この時点では風もそこまでではなく、日が出たら暖かさを感じるほどでした。確かに耳や指先といった細かい部分では多少冷たさがしましたが、まだ余裕でした。9時40分ぐらいに開門。9時開門とかいうデマ情報に踊らされて無駄に早く来たのが幸いして前から2列目の席を確保できました。自分の前、

つまり最前列には古木克明選手のファンが陣取っていました。なお、ファンの席は三塁側内野席。マスコミや球団関係者はバックネット裏でした。やや髪が薄くてサングラスをかけている異常にガタイのいいスーツ姿の男、坊ちゃん刈りみたいな髪型の中年男性。これは監督たちでしょうか。人違いかも知れませんが。それとサングラスをかけた白人の男もいました。彼の正体は不明です。

グラウンドでは外野の芝生で選手たちが軽くダッシュしたりストレッチしたりと、各々アップをしていました。遠目から見るとよく目立ったのは広島の大谷の鮮烈な赤でした。それ以外はくすんだ赤が楽天で、オレンジが入っているのが巨人で、といった程度の理解は出来ましたがやはりちよつと遠い。オペラグラスは、買ったほうが良かったのかも知れませんか。近くにいた阪神ファンの集団は「あれがシモさん（下柳投手）」「あれがお杉（杉山投手）」などとオペラグラスを片手に選手がどこにいるかを的確に当てていました。田中慎太郎選手のような育成枠や中谷選手、大城選手といったOBも知悉しており、観戦経験の豊富さを感じられました。

10時を過ぎ、選手たちが外野の一角、レフト側に集められました。トライアウトの説明を受けているのでしょうか。それが終わると選手たちは一旦ベンチの中に消えていきました。下柳選手が、G・佐藤選手が目の前を通過していくのを至近距離で眺めました。しばらくするとまた出てきて、キャッチボールを開始しました。中には下手投げでキャッチボールをしている選手もいました。今思うとあれはサブマリン投法で知られる塚本投手だったのでしょうか。

次にシートノック。ノックを打つのはオリックスの塩崎コーチでした。これもまああえて何かを言う場面ではありません。守備にミスがない、肩が強いなどと今更言っても釈迦に説法。逆にエラーしたりボテボテの返球だと目を引くほどでした。投手陣は姿を見せず。

おそらくマウンドで投球練習をしていたのでしよう。

そしてようやく本番となるシート打撃が始まったのは大体11時あたりでした。最初に登板したのが下柳投手。対戦する打者はG・佐藤選手でした。投手はカウント1―1の状態から打者4人と対戦します。ランナーが出たらそのまま残りますが、4人目の打者はヒットを打つなどして一塁に生きてもすぐベンチに戻ります。4人と対戦した投手はそれで出番終了ですが、野手は投手が尽きるまで延々とループしていきます。下柳投手の次はソフトバンクの、というよりロッテのといったほうが分かりやすそうな藤田投手。その次は今年の日本シリーズでも登板した河原投手がマウンドに立ちました。この辺で出てくる投手は年齢順と気付きました。全体的には投手が優勢だったように思います。

投手が39人いたようで、39×4の156打席。とても長い戦いでした。このただでさえ長い戦闘時間をさらに長く感じさせたのは球場を覆う雲でした。厚いコートを着込むなどの対応はしましたが問題は足。日が当たらないと風も威力を増し、体の先端部分を襲いました。しかも最初に有名投手が連発したので、途中はちよつと実績に劣る選手が投げて正直中だるみというか厳しい時間帯がありました。特に背番号が3桁の投手が次々と登場するあたりは。球場内の売店は閉まっており、駅の近くにあるコンビニで昼食を調達しましたが、凍えた体を揺り動かすために多少走りました。

目に付いた選手としては、加藤大輔投手は球速もそれなりに出ていたしこれはすぐにでも球団が決まるのではという感じでした。最後のほうで元中日の樋口賢投手が出てきましたがこの樋口、詳細不明の何かが起こって2年で退団という非常に不可解な去り方だったのでここに復活した事を喜ばしく思います。140キロを超えていたし素材としてはありなのでは、などと臆言発言をしてみますが獲

るのは編成担当者ですし。

続いて出てきた松田翔太投手は、投球練習の時点で観客を沸かせていました。なんと、左投手でありながらアンダースローも駆使していたのです。サブマリン専用ではなく、普段は上からでバリエーションとして横や下でも投げるといったタイプのようですが、アンダースローを披露した時には「水原勇気か」などというざわめきが起きました。そして実戦でも1球アンダースローで投げて、ストライクを取りました。この松田投手でトライアウトは終了。最終盤はネームバリューはないもののなかなか個性的な選手が出てきたのでなかなか面白い光景でした。

野手では、一番歓声が大きかったのは古木選手でした。オリックスの以前のビジター用ユニフォームに、帽子だけは紫に白い字でMという別物という不思議な格好でプレーしていましたが、意外と鋭い打球を飛ばしていました。格闘家転身など波乱万丈の人生を送る選手ですが、球界復帰となると色々面白そうです。とりあえず乱闘参加は禁止で。バッティングが上手かったのは田中慎太郎選手でした。二軍での打撃成績も良いのですが、守備位置の問題があるようです。

一方で明らかに球威がなくて「ああ、これは厳しいな」と感じざるを得ないベテラン投手や、コントロールに不安があっていきなりストレートの四球（正確にはボール3連発）で球場を絶句させる投手などもありました。野手でもエラーを連発するとやはり厳しいし、明らかにヒット打てそうにないなという選手がやっぱり駄目だったりすると何とも言えなくなりました。全員がプロとはいきませんが、各々にとっていい道が開かれるとそれが一番素晴らしい事でしょうし、無責任ですがそうなればいいな。

トライアウト終了後、すぐに帰ると電車が込みそうなのでマスコミと一緒に球場出口に群がりました。マスコミが多く群がったのは古木選手と中谷選手でした。他の選手は出てきたら「お疲れ様でしたー」と言うぐらいでスムーズに車まで進み、その姿をテレビカメラに収めたり写真を撮ったりという程度でしたが、この2人の周辺にはマスコミによる輪が作られ、選手は足を止めて簡単なインタビュウをしていました。合間には「古木選手を撮れました、中谷選手も撮れてると思います」とか「後は古木選手が車に出入りする場面を撮って」などと電話で連絡を取る姿がそこかしこに見られました。

個人的に印象に残ったのは子供2人「サインくださいー」選手「何言ってるんだ（笑）」とかいうやりとりの後、すかさずその選手が「（この子供たちは自分の）教え子です」とか言ってた場面でした。この選手はどうやら田中聡選手ですね。ちょっと和みました。田中選手は34歳ながらこのトライアウトに参加しており、野球という流れは1本ではなく多くの支流によって成り立っているという事実を垣間見たようです。

ルートを知った分、行きより帰りのほうがスムーズでした。しかし疲労はあるのでその分の減速はありました。10時前に帰宅したら軽くシャワーを浴びてすぐに眠りました。複数の人間ドラマが生々しく交差する場面に立ち会う経験はそうできるものではないので、見に行つてよかったと思っています。でも寒さだけは勘弁、というか次はもっと真面目に寒さ対策しようと強く心に誓いました。

リアルレポート トライアウト（後書き）

ほとんど小説と関係ありません。しかしまあ、例えるなら漫画単行本の余ったページに掲載される作者の内輪話みたいなものというところで理解していただければ幸いです。口調も本分の断定口調ではなく丁寧口調で別物感を出してみました。あくまでもやま話だからこんなのも書けるのです。

V戦士インタビュー 星渡晃兵

今季大日本リーグ28球団の頂点に立った大連バトルシップス。その大いなる覇権に貢献した選手たちの様々なドラマをインタビューを通じて迫る。今日は不動のトップバッターとして活躍した大連の若きス皮ードスター星渡晃兵外野手に話を聞いてみた。

インタビュアー(以下イ) 「東洋一おめでとうございます。」

星渡晃兵(以下星) 「ありがとうございます。目標としてきたので本当に嬉しいというか、やったぞという感じですね。」

イ 「まず、今季を振り返ってみて、星渡選手にとって今季はどのようなシーズンだったでしょうか。」

星 「とても充実したシーズンでした。チームが優勝を争う中で自分もチーム全体もどんどん良くなっていくのを感じたし、それで結果も出たので。その点はすごく満足しています。」

イ 「個人成績については？」

星 「今季は統一球なのでホームランという点ではやはり減りましたね。それは来年以降の課題ですけど、それ以外の、特に打率に関しては3割を目標にしてきたので。それに盗塁もとりあえず40つてのはあったので、達成できて良かったと思います。」

イ 「今季はプレーがより積極的になったように感じました。」

星 「ええ、それは自分でもかなり意識しました。もう24になりますからね。そろそろ期待じゃなくてしっかりした実績を残さないといけない時期。今のままに固執してはいけないと思って。」

イ 「その結果が今季の成績につながったわけですね。」

星 「いやあ、まだまだですよ。来年はタイトルも取りたいし、そのためにはもっと鍛えないといけない。現状に浮かれたらあっという間に取り残されるのがこの世界ですからね。」

イ「さて、お話は変わりますが、星渡選手が野球を始めたきっかけは何でしょうか。」

星「父はラグビー、母は陸上、兄はサッカーというスポーツ一家なんです。父は何でもいいから熱中するものを見つけてるようにとよく言っていました。で、僕が小3の時に野球やりたいって言うтусぐグローブを買いに行った。兄はサッカーで周りの友達も静岡だし結構サッカー派が多かったんですけど、自分は自分だしてのもあって。松枝東ファイターズってチームでした。」

イ「小学時代のポジションは？」

星「結構色々やりましたね。レギュラーになったのは4年で、その頃はライト。5年でセンターやレフト、それにピッチャーもしましたね。6年はピッチャーメインだった。でもそんなに強いチームじゃなかったし、遊びの延長みたいなものでした。」

イ「打撃については？」

星「内野安打が多かったですね。足は速かったし左（打席）なので。小学生の頃は全然パワーなくて、やせてたから長打はほとんどなし。ワイヤーみたいな手足ですよ。変わったのは中学時代からですね。」

イ「中学時代はどう変わったのですか？」

星「成長によってパワーがついてきたのもありますが、一番大きかったのは2年の時に県大会で勝ち進んだ事ですね。これでやれるじゃんって思った（笑）。それとこの活躍が雑誌に載ったんですよ。バネが凄いとかが将来有望とか書かれてて、はっきりに言って調子に乗りました（笑）。見られてると意識されるのもつといいところ見せようとなるし、そのためにはどうすべきかってのもだんだん見えてきたような気がする。とにかく、自分は注目されたほうが燃えるタイプなので。」

中学時代にそのたぐいまれな身体能力を見込まれ、各地から注目を浴びるようになった。中には東京の高校からのスカウトもあったという。その中で星渡は、地元と言える富士見ヶ原高校に進学した。

イ「中学時代に静岡中の評判となり、東京の高校からもスカウトされたそうですが、富士見ヶ原高校に決めた理由は何でしょうか。」
星「まあ兄と同じだとか家から近いってのもあったんですけどね（笑）、最後の決め手となったのは鈴木守弘監督です。兄からも話は聞きましたが『いい監督さんだぞ』って（笑）。」
イ「入ってみてどうでしたか？」

星「厳しかったですよ、それはもう。毎日帰宅すらままならないほど疲れました。鈴木監督は『お前をプロにするのが俺の仕事だ』っていつも言っていましたから。監督のお陰で自分も『絶対高校からプロになってやる』と思うようになりました。」

イ「プロのスカウトから注目されるようになったのはいつ頃でしょうか。」

星「2年生の夏の大会ですね。県予選でピッチャーとして決勝戦まで行きました。背番号は10でしたが、凄い素材がいるみたいに言われて。ただピッチングよりも俊足とかバッティングフォームに癖がないみたいな事をよく雑誌に書かれてましたよ。投手としての評価はほとんどなかった。」

イ「投手としてはどのようなタイプだったのでしょうか。」

星「投手としての技術は全然なかったですね。それこそ身体能力だけで、それでも143キロ出るのは凄い、みたいな感じで。ただ自分でもピッチャーとしてはそこまでないというか、プロとなると厳しいかなとは自覚していました。もう投手に未練はありません。」

一度も全国大会に出場できなかったため一般的な知名度は低かったが、大連のスカウトは外野手の最有力候補として追跡を続けてきた。そして第2次ドラフト会議の1人目、全体で言うと棚橋に次ぐドラフト2位で指名した。

イ「ドラフトでは大連の2位指名でしたが。」

星「正直2位は驚きました。中位指名だと聞いていましたから。聞いたのは授業中でしたが大連の2位指名って先生から聞いたとき『嘘でしょ』って言っちゃいましたから（笑）。」

イ「大連の印象はどうでしたか。」

星「日本列島以外に言ったことはなかったので多少は不安でしたけど、プロになれるのだから場所がどうみtainなこだわりはなかったですね。」

星渡2位指名はファンやマスコミにとってまったく寝耳に水の指名であった。本人の実力よりサツカー選手星渡利一の弟であるといった報道が目立った。しかし間もなく「星渡利一の弟」ではなく「星渡晃兵」としてファンの耳目を集めるようになる。プロ1年目から二軍のセンターに定着。打率は.238と1年目にしてはなかなかの数字を残した。また、チーム最多の26盗塁を決めるなど早くも高い身体能力を見せた。

イ「プロ1年目の印象はどのようなものでしたか？」

星「まず二軍キャンプの初日から全然違いました。とにかくみんな大きい。それで速い。僕は今でも小さいほうだし新人の頃はもつとでしたから、どうしよう、居場所なんてあるんだろうという怖さがありました。」

イ「しかしシーズンでは二軍のセンターに定着しました。」

星「監督が使ってくれたのが大きかったですね。でも自分としてはもつとこうやりたいのに未熟だから全然できなくて。野球をやって一番きつかったかも知れません。」

イ「それは具体的にどういうことでしょうか。」

星「それまではただ身体能力だけで野球をやっていたんだと思い知らされましたね。林（葉輔）さんが怪我から復帰して二軍で調整す

るのを見ましたが、力を入れている風でもないのに打球が凄い勢いで飛んでいく。それに比べて自分は力任せで不恰好なフォームで恥ずかしかったですね。フォームに関しては未だに満足していません。林さんは流れるように美しいフォームだけど僕のはもう全然ぎこちなくて。野球技術を貪欲に追求するようになったのは1年目がようやく終わりにかけてからです。」

イ「じゃあ1年目の成績については。」

星「ええ、全然満足していませんでした。それに野球選手は一軍でやってなんぼですから。でも自分はそれに値しないと分かっていった成長するしかないのになかなか進めなくて、怪我しなかったのは幸いでしたよ。」

2年目、当時大連の監督を務めていた潔原勇仁（52）によって春季キャンプ一軍スタート組に抜擢される。俊足を買われてのことだった。この頃、大連は盗塁王を獲得した経験のある三浦修吾（39 現在解説者）の足が衰えを見せており、新たなトップバッターが求められていた。

イ「そして2年目には一軍で起用されるようになりました。」

星「足の速さは確かに上のほうだったので、まずそれを切り口に一軍出場できれば、ぐらいの考えでした。打撃に関しては全然でしたし未熟なのは自覚していましたから。でも紅白戦やオープン戦で偶然ヒットが出て開幕まで残った。」

イ「初出場はいつでしたか？」

星「それが開幕戦だったんですよ。相手は新京で、7回に李安重さん（現台北二軍打撃コーチ）の代走で。今は安東にいる野瀬（久幸）さんがピッチャーでした。」

イ「結果はどうでしたか。」

星「その時は特に何もなく。でも凄く緊張しましたよ。牽制も凄い勢いで迫ってきて、ビデオで見ると帰塁が明らかに変な動きで（

笑)。初打席は次の試合でピッチャーは久慈（一正）さん。何も出来ずに三振でしたね。監督にとにかく振って来いと言われたので、それは実行しましたけど（笑）。」

イ「結局この年は67試合に出場して打率・220でした。」

星「ほとんど代走とか守備固めだった気がします。試合感覚を身につけるために二軍の出場も多かったので忙しい年でした。でもこの年は色々学べました。一軍のスピード、それについていくにはどうすればいいか。ウェイトトレーニングを始めたのがこの年のオフからですね。」

3年目は星渡にとって飛躍の年となった。レギュラーとして123試合に出場、打率・274本塁打3盗塁21とブレイクを果たした。また、この年限りで三浦が京都に移籍して2年後に引退。それ以降、大連の1番センターは星渡で固定される。

イ「3年目からレギュラーに固定されました。」

星「この年のキャンプで三浦さんが怪我したので潔原監督はオープン戦で多く使ってくれました。これはチャンスだという事で今まで以上に積極的にアピールしましたね。打撃も守備も一歩が大事というか、とにかくミスをして前へ前へと意識しました。確か打率は3割超えて開幕戦スタメンまで行きました。」

イ「その開幕戦で今や伝説となっているファインプレーが生まれました。」

星「バッターはハルビンのマテオ・ソサ（32 現マイナーリーグ）で、長打に警戒して下がっておけという指示は出ていました。打球は左中間へのかなり強いライナーで、走っても届くかちょっと不安でしたが、それを振り払うように走って無我夢中でジャンプしたら取ってて。もうこの時点で頭は空っぽ、全部吹っ飛んでました。でも内野を見るとランナーが結構離れていたもので、とにかく届けと二塁に投げると意外といい球で（笑）、とにかくすべてにおいてうま

くいきすぎでした。」

イ「これで潔原監督は星渡選手を使い続けようと決心したそうです。」

星「そういう意味では本当に大きかったですね。自分としてもこういう無我夢中に頑張っていくしかないと思いました。それで1年、途中息切れもしましたが一応持ったというのは自信にもなりました。」

イ「そしてその翌年となる一昨年は3割到達、劉監督に代わった昨年は20本塁打と打撃も開眼しました。」

星「自分としては去年の20本より一昨年の3割のほうが嬉しかったです。1番打者ですから、もちろんホームランも必要ですが塁に出てなんぼですから。そういう意味では四球が少ないのはもっとどうにかしないと、とか思っています。」

イ「星渡選手の理想とする選手像は？」

星「とにかくファンからの信頼が大事ですね。星渡なら大丈夫だろうと思われます。そしてそれを長く続けたい。大連といえば星渡のいるチームと思われるぐらいに。林さんはそこまで行っていますが自分は全然。目標は林さんですね。」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

星「今季はチームとしても個人としても納得できる成績を上げられましたが、まだこれが完璧ではないと思っています。目標としてはまず打率3割、その上でホームランも狙っていききたいし盗塁もガンガン仕掛けていきたい。そうした積み重ねによってチームの目標である連覇も見えてくるはずです。ファンの皆さんの応援は本当に力になりました。来季も変わらぬ声援をよろしくお願いします。」

緊急インタビュー 新加入の呉& a m p ; 草原

トレードでの加入が決まった呉清元外野手と草原輝喜投手。来季からの頼もしい戦力となりそうなこの2選手にQ & a m p ; A方式による簡単なインタビューを試みた。質問は9つ。

Q1 トレードが発表されてから3日、今の気持ちを聞かせてください。

呉清元（以下呉） 僕は生まれてからずっと台湾にいたので今回の移籍で初めて台湾以外の場所に本拠地を持つ事になります。最初に（トレード話を）聞いた時は不安もありましたが、今は新たな挑戦を楽しみにしています。

草原輝喜（以下草） もう契約は済んでいたのので来季も台南でやるつもりでした。しかし大連というチームに必要とされたのは光栄ですし、期待に応えなければと思っています。

Q2 トレードはいつ知りましたか。

呉 会見の前日でしたね。安兵久球団代表に呼び出されて聞かされました。断腸の思いだった事や大連のほうから求めたトレードだったといった話でした。最後までずっと台南でと考えていたので少し悩みましたが、最後は新たなチャレンジと思い直して（トレードの話）受けました。

草 僕も前日でした。練習場で自主練習をしている途中に呼び出されて聞かされました。今季の成績は良くなかったので来季こそはと思っていました、これも自分のためと思いすぐに切り替えました。

Q3 背番号は呉選手が3番、草原投手が45番に決まりました。

呉 3番は打撃のいい選手が着ける番号。球団からも期待されているという事なので身の引き締まる思いです。台南時代の背番号9に

も愛着はありましたが大連には僕なんかよりふさわしい選手が着いていますから（大連の背番号9は林葉輔外野手）。新たなチャレンジに新たな背番号のほうがいいでしょうし。

草 背番号にはそれほどこだわりはありませんが、大連の45番といえは草原投手と思われるぐらいの活躍をするぐらいになりたいですね。

Q4 大連という球団についての印象は。

呉 若い選手が多く、28球団の中でもかなり元気がよくてグングン伸びているという印象があります。僕は33とベテランと言っている年齢ですが、今までと異なる環境で僕自身もいい刺激を受けながら若い選手にも色々教えられれば。

草 投手陣は若くて力のある選手ばかりだし、一番勢いがあるチームだと思っていました。実際のところはまだ分かりませんが、いいチームだと思います。

Q5 大連で特に気になる選手はいますか。

呉 そうですね。やはり星渡（晃兵）君でしょう。彼は何でもできる選手でその才能がうらやましい。守備や走塁は自分が教えてほしいくらいだけど（笑）打撃に関しては色々話し合えそう。それに林（葉輔）さん。本当に打撃技術が素晴らしい。特に変化球の打ち方は常々参考にしていたので。

草 張尊投手ですね。投球術を見習いたいです。

Q6 自分のセールスポイントを教えてください。

呉 打撃ですね。特に長打とランナーがいる場面での勝負強さには常にこだわってきたので、そういうところを見てもらいたいですね。草 左腕という点、それとストレートには自信を持っています。

Q7 呉選手から見て草原投手は、草原投手から見て呉選手はどの

ような人物ですか。

呉 寡黙ですが常に真面目で練習熱心ですね。特に野球に対しての情熱はかなりのもの。でも時々考えすぎるところがあるので、それもいいけど気分転換もうまくやるのも技術の一つだからね。でもきつと将来は大物になりますよ。

草 見た目は怖いですけど（パーマのかかった長髪と口ひげがトレードマーク）、僕みたいな若手選手が一軍に上がったときは気さくに声をかけてくれますし、野球に対してもここぞという場面での集中力が凄いので見習いたいです。

Q8 来季への意気込みをお願いします。

呉 東洋一に輝いたチームに必要とされたという事で、つまりは自分の打撃力を買われたものだと思っています。まずは打撃についてはファンや球団の期待を裏切らないようにしたいですね。とりあえず数字としては2割8分、20本塁打、そして打点は80を目標にやっていきたいですね。

草 大連にはいい投手が多いですが、キャンプからしっかりアピールして先発に食い込んでいきたいです。具体的な数字はまだわかりませんが、とにかくどんな役割であれ1年間投げきることでチームに貢献できれば。

Q9 最後に、ファンに向けて一言お願いします。

呉 今一番勢いのあるチームで来季からプレーできる事を光栄に思っています。まずはしっかり数字を残す事でファンの皆さんに認めてもらいたいと思っています。来年からは大連の呉清元をよろしく願います。

草 まずはグラウンドで僕のピッチングを見せられるように頑張りたいと思っています。見ていてください。

V戦士インタビュー 比山仁

延長戦がなくなった今季、大連の9回を守り抜いたのが比山仁であった。潜在能力は認められながらもこれまで発揮できずにいた彼だが、ついに覚醒してチームの東洋一に大きく貢献した。活躍の秘訣は何だったのか。

インタビュアー（以下イ） 「東洋一おめでとうございます。今季は大活躍でしたね。」

比山仁（以下比） 「ありがとうございます。」

イ 「まず、今季抑えの切り札としてチームになくはない存在となりましたが、今年を振り返ってどうでしたか。」

比 「その時その時は辛かったり苦しかったりはあつたはずですけど、今となってはあつという間に過ぎ去った感じですね。」

イ 「それだけ充実していたという事でしょうか。」

比 「そうですね。今季は結果が出たのが良かったですね。監督からは『9回は何があつてもお前だ』と言われて、それで今まで以上に燃えたというか、力を引き出してもらいました。」

イ 「確かに、抑えとしてセーブを積み重ねるごとにピッチングが良くなっているように見えました。」

比 「やはりバッテリーを抑えると楽しいですし、セーブがつくのもそう。ピンチでも今までは『ここで打たれたらどうしよう』でしたが『何としても抑えてやる』と強気に考えられるようになりました。」

イ 「最終的には36セーブを積み重ねたわけですが、この数字についてはどう思いますか。」

比 「まあ満足しています。ただ今年は割とずっといい調子だったのでもこの数字を残せたという部分もあるはずです。来季以降もこの36セーブを目標にしたいですが、それには悪いなりに抑えられるようにならないといけない。まだまだ伸ばせる場所は多いと思います。」

比山は熊本県出身。野球が盛んなことで知られる土地でおおらかに育った。子供の頃は運動神経がよくスポーツなら何でも得意な明るく活発な子供だったという。

「比山選手の球歴について伺います。比山選手が野球を始めたのはいつ頃でしょうか。」

比「確か10歳の頃です。最初はサッカーをしていたんですけど、練習するグラウンドが隣の小学校で遠かったので、自分の小学校にある野球部に入ったのが小4でした。」

伊「ポジションはどこでしたか。」

比「1年目は控えて、5年生で外野手になって、6年生で内野手でショートがメインになりました。」

伊「ピッチャーはやらなかったのですか。」

比「小学生の頃は身長が低かったの。あ、でも少しは投げたかも。まあメインは内野で、ピッチャーはほとんど記憶がありません。中学に入ると身長が伸びてきたのでピッチャーがメインになりました。3年で30cmは伸びましたね。」

伊「中学時代はどのようなピッチャーでしたか。」

比「それまで投手したことがなかったので変化球は投げられませんでしたが結構抑えられましたね。」

伊「それはやはり比山投手の天性の野球勘ということでしょうか。」
比「そう言われると凄いですね（笑）。でもまあそういうことだったのかも知れません。中学校で野球部の顧問だった月田先生がOBという事で熊本南高校に進学しました。」

熊本南高校は熊本県でも屈指の野球名門高校として知られている。この恵まれた環境で本格的な指導を受けた比山はおおいに成長し、九州でも屈指の本格派投手としてプロのスカウトたちからの熱い視

線を集める事になる。

イ「高校時代はどのように過ごしていましたか。」

比「ずっと野球野球でした。同級生には大阪から野球をするためだけに来たという部員もいましたし、僕は地元出身だけどそういう別のところから来た部員には負けられないようにとずっと思ってた。頑張りました。基本的にのんきな性格でしたが、とにかく高校時代はずっと燃えていたような記憶があります。」

イ「そして187cmの長身から繰り出す最速148キロのストリートが武器の大型右腕として注目されるようになりました。」

比「プロのスカウトがグラウンドに来たことはありません。しかし正直に言いますと高校の段階でプロはまだ早いと思っていました。技術が全然足りていませんでしたから。まず変化球がほとんどないそれにコントロールも酷いものだったし、プロに入っても通用するレベルには遠かった。」

イ「それで大学進学を決意したのですね。」

比「ええ。色々な大学から声がかかりましたが関西体育大学に決めたのは、OBの宇多利通さん（37 現安東）にあこがれたからでした。当時は福岡のエースで何度か試合を見に行きましたが、僕が見た試合はいつも完封か1失点ぐらいのピッチングで『これがエースなんだ』と思いました。常に結果を残すのがエースなんだろうと考えていますから、理想はあの宇多さんです。」

イ「大学では1年生の時に怪我をしたもののその後復帰し、3年春のシーズンにはリーグ最優秀選手に選出されるなどまた一段と大きく成長しました。」

比「怪我したときは焦りました。でも大島準監督が『まだ3年あるから絶対に焦るな』と言ってくれて。とにかく怪我してから体幹を鍛えました。この時にしっかりと体の基礎を固めたお陰で今年も持ったんだと思います。公式戦初登板は2年の秋でしたが、今までより軽く投げたはずが威力は増していて効果を実感しました。それ

に変化球もこの頃によくものになりました。今投げているフォークも大島監督から教わったものですし。」

イ「そしてドラフトでは大連の3位指名でした。」

比「僕の場合4年生の時に少し肘を痛めたのでアピールする期間が短かった。でもとにかく指名されればいいと考えていましたから。どこじゃないとか順位のこだわりはありませんでした。むしろ3位は予想以上に高かったぐらいです。」

本格派として期待された比山だがプロでは伸び悩んだ。ブルペンでは抜群のボールを投げるのにマウンドに立つと緊張のあまり普段の実力を発揮できず炎上を繰り返して3年が過ぎた。しかし劉監督はそんな比山に抑えの重責を担わせた。

イ「プロに入ってからはどうでしたか。」

比「1年目の春季キャンプでは一軍スタートでしたがまったくついていけませんでした。テレビで見た選手たちが今日の前にいるなんて思って、完全に飲まれていた。で、張り切りすぎて故障して、4月まで復帰できませんでした。」

イ「しかし復帰後、二軍戦では防御率1点台と実力を見せ、一軍での登板も経験しました。」

比「一軍初登板は覚えていません。緊張だけで全てが終わった。結果は酷かったです（1回を3失点）何を投げて誰に打たれたとかもビデオを見て初めて知ったぐらいでしたから。」

イ「昨年までなかなか台頭できなかったのは精神的な面によるものが多いのでしょうか。」

比「そうですね。自分にプレッシャーをかけすぎていたというか、完璧な結果を求めすぎていたんだと思います。四球を与えてはいけないのは当然ですよ。でも出てしまう時は出るものですから。去年までは四球を出したらその事について考えすぎてしまい、崩れる事が多かった。」

イ「しかし今年はそういった場面もほとんどありませんでした。精神的な壁をどのように克服したのでしょうか。」

比「まずポジションが固まったのが自分にとってはやりやすかったですね。当初は先発かりリーフかわからなかった。調整の仕方が違うのでちよつと混乱した部分もあった。でも劉監督は後ろでとまらず決めた。それで調整が楽になったのはあります。それと今年は自分が抑えをするにとつて楽なルールでした。」

イ「それはどういう事でしょうか。」

比「今年は延長戦がなくなったので9回は一番最後でしょう。自分が打たれたらその時点で終わり。僕の場合はそれでようやく開き直れた。内容よりもセーブという結果が大事なんだと。それに先発から小松原さんや野藤さんやみんながつないで最後を任せるというポジションなので、責任感がありますよ。チームの勝敗は自分のピッチングにかかっているんですから。去年まで抑えの西坂（有司 31 現京城）さんがいなくなって、もう逃げ場はない、自分がやるしかない。」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

比「今年は自分にとつてもチームにとつても最高の結果を残す事が出来ました。まずはそれを続ける事。個人の目標としては、やはりタイトルはほしいですね。岩辺（仁志 名古屋）さんや辻川（久児 大阪）さんのような長く活躍できる抑えになればと思っています。ファンの皆様には、今年も勇気付けられました。皆様の声援あつてのプロ野球選手なので、来年からも球場での声援をお願いします。」

V戦士インタビュー パウロ・ミネイロ

地球の裏側、ブラジルから来た大砲であるパウロ・ミネイロは今季規定打席に到達し、長距離砲の多くない大連にあってチーム最多のホームランを放つ活躍を見せた。丸太のような両腕からあふれるパワーと黒豹のようにしなやかな身体能力を両立させるスラッガーに話を聞いた。

インタビュアー（以下イ）「東洋一おめでとうございます。」

パウロ（以下パ）「ありがとう。本当に誇らしいよ。（右足を指差して）ここの傷さえもね。」

イ「怪我の回復具合はどうですか。」

パ「順調だよ。今は大連でリハビリを続けているけど、1月には復帰して、チャンプインには間に合う予定だ。」

イ「一日も早い回復をお祈りします。」

パ「元はというと怪我なんて自分の責任。しかも大日本シリーズの途中という一番大事な時期だったので悔いはあった。でも気にしても仕方ないからね。こうなったら来季も同じ場面を演出して、今度は自分もその場に立ってみようというモチベーションになっているよ今は。」

イ「ところで今季の成績についてですが、統一球で打球が飛ばない中、チーム1のホームラン数を記録しました。」

パ「それ自体は確かに勲章に見えるけど23本だからね。僕としては全然満足していないよ。」

イ「それは本数がもっと打てたということですか。」

パ「その通り。飛ばないと言っても50本近く打っている選手もいるんだから。せめて30本はいかないとホームランを期待されている選手としては期待に応えたとは言えないね。」

イ「統一球の影響はありましたか。」

パ「それをあまり弁解していると言いつい訳になるけどなかったわけじゃないね。でもまったく対応できないわけじゃないし、来季は最低30本を約束するよ。」

イ「期待しています。」

パウロはブラジルのサンパウロ州出身。ブラジルでは国技と言えるほどにサッカーが盛んで、本人もサッカーは好きだと言う。ブラジルの地でいかに野球と出会い、遠く大連まで渡る事になったのか。

イ「パウロ選手の球歴についてうかがいます。野球を始めたきっかけは何だったのでしょうか。」

パ「家の近くに野球アカデミーのグラウンドがあって、それを見ているうちに興味が出たんだ。ブラジルではサッカーが盛んなのは知ってるだろうけど、僕もずっとサッカーをしてきたし今でも好きだ。でも、僕はちよつと変わり者だったからサッカーだけじゃなくて野球もしてみたいと思い、アカデミーの生徒に教えてもらったんだ。それが10歳の時で、アカデミーに入ったのは13歳の時だった。」

イ「アカデミーとはどのようなところでしたか。」

パ「全寮制で、午前は学校午後から練習というスタイルで野球の基礎から実戦に至るまで全てを学んだ。日系人が多かったけどそうでない生徒も多かった。割とおおらかな空気に包まれていたけど、試合となると闘争心むき出しで楽しかったよ。」

イ「試合ではどういうチームと対戦していましたか。」

パ「まず多かったのは紅白戦。それに大人のチームともよく試合をしたね。それと、確か15歳の時だったけど日本の大学のチームが来て（九州地方大学選抜チームのブラジル遠征を指す）試合をしたね。あのチームは強かった。僕は代打で出たけど変化球が大きく変化するのでまったく見えなかった。」

イ「その試合で日本や東洋の野球に興味を持ったのでしょうか。」
パ「いや、それは関係ない。目を向けていたのはアメリカだけだった。」

たからし、技術も未熟でスカウトされるほどではなかった。ただ凄
いと思って、それだけだった。」

イ「ではアカデミーから大連に入団した経緯はどんなものだったの
でしょうか。」

パ「アカデミーには19歳までいた。19歳のときにブラジル選抜
を作って日本での大会に参加しようという話が出て、僕はそのブラ
ジル選抜に選ばれて日本に来た。」

イ「その頃はどのような選手でしたか。」

パ「ポジションは今と同じサード。体格が完成してきたのでパワー
も発揮できるようになった。でもミートは下手だった。当たれば飛
ぶが当たらないというのはまあ今も大して変わらないけど、もっと
極端だった。とにかくそこで日本の大学生相手にホームランを打っ
たんだ。相手は今台北にいる島尾（啓）だ。それ以外はほとんど駄
目だったけど視察に来ていた野間（公正 大連スカウト）さんが目
をつけたらしいんだ。アメリカでというのはあったけどプロならど
こでも同じと思ってその場で契約した。」

イ「それまでは大連はまったく知らなかったのでしょうか。」

パ「率直に言うとそのとおりだ。でも今は最高に好きな街、好きな
チームだよ。ここを離れることはまったく考えられないよ。」

大連に入団したパウロは、プロ初年度こそ技術レベルの違いに戸
惑ったものの持ち前のセンスでこれを克服。2年目から一軍の試合
に出場するようになり、3年目からはチーム随一のパワーを買われ
てレギュラーを奪うまでになった。そしていきなりホームラン王に
後1本と大爆発を見せた。

イ「大連に入団して、まず思ったことは何でしたか。」

パ「プロのレベルの高さだった。特に守備はまるで機械で動いてい
る様に見えた。打席に立つと変化球の切れ味が凄くてとても通用し
そうにないと思えたよ。」

イ「それをどのように克服しましたか。」

パ「結局努力しかないよ、これは。まずは目で技術を盗む。そして日本語を覚えてコミュニケーションの中で技術のヒントを掴んだ。僕の場合は折口（元文 現チチハル）選手に教えてもらったやり方が一番合った。これでカーブを打てるようになった。すると他の変化球も打てるようになった。自信がついたら見えなかったものが見えるようになった。」

イ「このインタビューも日本語で行っていますが、確かにもうネイティブレベルに話せていますね。」

パ「日本語はしゃべるだけならそんなに難しくない。しかし理論的に話そうとなると難しくなるし、ひらがなカタカナ漢字を使って書くとなるともうパズルみたいで、今でも少し混乱する事がある。でもコミュニケーションを取れるとみんないい人だと分かったし、お互い公私に高めあう事が出来るようになった。」

イ「2年目に初めて一軍で起用されました。」

パ「初めて一軍の打席に立つ前、潔原監督に『全打席でホームランを狙え。駄目なら三振でいい』と言われた。自分に求められているのはつまりホームランだ、そう思えると余計な考えを捨てる事が出来るようになった。これが自分の生き方だと示してくれた潔原監督は日本での父親だと思っている。」

イ「そのホームランの意識が3年目のブレイクにつながったという事ですね。」

パ「そうさ。劉監督に代わったけど期待されている事は同じだったし、僕としても同じように伸びていけばよかったのは良かった。劉監督は理論的かつそれを情熱的に伝える事の出来る人。2人続けて素晴らしい監督の下で野球をやれているのは幸福だ。」

イ「そして今年、ブラジルから後輩のフェリックス・アマラウ選手も入団してきました。」

パ「フェリックスにとっても僕がいる事はプラスになっているだろうね。僕がブラジルから大連に入団したときは相談してくれる友人

も先輩もいなかったので辛かった。僕は彼の成長に関して協力を惜しまないつもりだ。」

イ「パウロ選手の目から見てフェリックス選手はどうでしょうか。」
パ「自分よりセンスのある選手だね。特に守備のフットワークなんてかなり完成されている。しかし守備も打撃もまだまだ磨かないといけない部分が多いし、そういう意味ではこれからの選手。まあ自分もまだまだ課題は多いし大きなことは言えないけどね。」

イ「将来はともにレギュラーとして大連で活躍という姿を見たいです。」

パ「将来はどうか分からないがそうなるに越した事はない。助言は惜しまないけど結局のところはライバルだ。彼にはサードを奪うぐらいに伸びてほしいし、そうなれば僕も対抗する。そうして伸びていける関係になれたら最高だね。それと、フェリックスは日本語を覚えて僕以外の色々な選手から知識を吸収していけばもっと早くいい選手になれるかも知れないよ。大事なのは色々な道を知る事。その中から自分にあった道を進めばいい。」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

パ「まずは怪我を治す事が先決だ。今年の成績は自分としても全然納得していないので、今はリハビリと並んでインナーマッスルの強化に取り組んでいる。それに守備におけるフットワーク強化のための特別なトレーニングもするつもりだ。オフと言っても休む時間なんてまったくないよ。早く次のシーズンが始まってほしいね。ファンにはより素晴らしい大連の野球を見せる用意は常にしている。」

新人入団会見

大連バトルシップスの新人選手入団会見が13日、大連市内のホテルで行われた。東洋一に輝いたチームに加わるのは本指名選手8名に育成枠指名選手の3名を合わせた合計11名。記者会見に同席した劉監督は「プロという大海原においても常にプロフェッショナルな野球人としての誇りを忘れず日々の精進を怠らないように。それが出来たなら明日の大連を担うのは君たちだ」とエールを送った。選手たちのコメントは以下の通り。また、背番号は竹松19、周37、星野29、升田57、金海36、車63、馬62、黒滝69、大頭131、陳132、森133と決まった。

1位 竹松龍徳 黒水高 18投左左

「ストレートには自信があるがまだ未熟な部分が多いので、プロという環境の中で成長してしっかりしたエースになりたい。吉野（大吾）投手のような安定感のある投球が目標」

2位 周海健 吉林産業大 22捕右右

「まだスタートラインに立っただけ。リードと捕球技術には自信があるので（一軍スタートが内定している）春季キャンプからガンガンアピールしていきたい」

3位 星野風太郎 ノーザンウインド 20投左左

「ストレートとスライダー、シュートといった変化球に自信を持っている。先発でもリリーフでも与えられた仕事をきちんと果たして信頼される選手になりたい」

4位 升田憲次郎 水谷学園 18内右右

「バッティングをもっと伸ばしてホームランを常に狙える選手にな

りたい。将来は三冠王を取れるような選手になりたい」

5位 金海泰州 PDL電器 25投右右

「リリーフとして期待されていると思う。大阪の辻川（久児）投手のようにストレートで押しまくるピッチングをプロでもしていきたい」

6位 車峰秀 水原第一高 18捕右右

「打撃と肩、特に打撃は自信がある。吉田（敦志 元京都）捕手のような打撃も守備もできる捕手になりたい」

7位 馬智徹 瑞芳大 22外右左

「足の速さは自信がある。プロでは打撃を鍛えて目標は札幌の糸田嘉人選手のような走攻守すべてが揃った選手になりたい」

8位 黒滝通 緑ヶ原高 18投右左

「自分の持ち味である向かっていく姿勢を常に忘れず、松浦先輩や平野先輩と同じフィールドに立つために努力を続けたい」

育成枠1位 大頭光司 独立リーグ岡山 20投右右

「身長193cmの長身それ自体が武器になると思っている。ストレートには自信がある。まずは支配下登録を目標に努力を続ける」

育成枠2位 陳英孝 独立リーグ鞍山 24内右右

「今年が最後のチャンスと思って頑張ってきた。自分の持ち味は長打力なので、そこをしっかりとアピールして支配下登録を目指したい」

育成枠3位 森康弘 白砂学院 18投右右

「体の柔らかさとストレートの質には自信がある。しっかりと怪我をしない肉体を身につけて一軍にあがれるようになりたい」

V戦士インタビュー 松浦心・平野錦

大連投手陣に今季突如出現した新星であった松浦心と平野錦。幼稚園の頃からずっと一緒だったという両腕がプロ2年目にして先発にリリーフにとチームを支えた。今日はこの2人にインタビューを試みた。

インタビュアー（以下イ） 「東洋一おめでとうございます」

松浦（以下松） 「ありがとうございます。まだ実績もあまりないのにインタビュー受けるとは思っていませんでした」

平野（以下平） 「2人合わせてやっと一人前と」

イ「そんな事はありません。松浦投手は先発、平野投手はリリーフを中心にチームを支えて勝利に貢献しました」

松「正直今年は出来すぎでした。ただ一生懸命投げただけだったので」

平「実力というか流れに乗ってここまで来たというか、去年の自分に現状を説明しても分かってもらえないでしょうね」

イ「しかし松浦投手は10勝、平野投手は防御率1点台と偶然では出来ない好成績です」

松「正直10勝という実感はあまりないんです。それよりも夏場に崩れて連敗して二軍で調整を命じられた時のほうが頭に残っています。先発としては規定投球回数に到達する事は大きいので、自分の力不足というか1年間を戦う体力のなさを痛感しました」

平「まずはワンポイントリリーフという役割を与えられたのでしっかりこなしたら終盤には1イニングを任されるようになって。僕の基本は左打者をしっかり抑える事なので、それは通用したので良かった」

イ「2人は幼稚園の頃から一緒だったそうですね」

松「近所ですから。歩いて1分以内に家がある。で、家の近くに工場があって、その駐車場がよくキャッチボールして遊んでました」
平「ずっと友達でした。キャッチボールもそうだし、ココロン（松浦の愛称）は宿題とかあんまりしないからよく『写させて』って来たり」

松「はは、そんなのもあったかな。でもニツキ（平野の愛称）は僕と違って真面目ですから」

平「はつきり言って性格は全然違うんですけど、だからこそ性格がかみ合うという部分はあるかも」

イ「ところで2人が野球を始めたのはいつでしょうか」

松「それこそ幼稚園の頃からキャッチボールとかしてて、当時言うとうと広島（山口）（泰久）現広島投手コーチ）さんのフォームを真似したりしてましたね。小学2年生の時に一緒に野球部に入りました。他の選択肢はありえなかったというか、基本的に野球一筋でした」

平「最初はもちろん控えで、大体小学4年ぐらいからスタメンでも出るようになりました。ポジションは僕が大体ライトで」

松「小4の頃はセカンドが多かったですね僕の場合は。で、投手は5年生の時に監督にやってみろと言われて。6年の頃にはピッチャーかサードでした」

平「5年からはセンターが多くて、6年の時に左だからという事で投手もやりました。フォームは普通に上からで」

松「でも当時からボールに変な回転かかってたよね。打とうとしたら何かゴロになるような」

平「あれは握り方が分かってなかったから。自然に変化してたから試合中審判に声をかけられた事もあった。ルールでは変化球禁止なのに変化球を投げてるんじゃないかと。わざと投げてるんじゃないしどうしようってなった」

イ「中学時代はどうでしたか」

松「中学時代は外野が多かったですね。自分としてもその頃は投げるより打撃が楽しかったので、ピッチングはあんまり練習してませ

んでした」

平「僕は左なのでピッチャーでした。控えの」

松「僕も少しはピッチャーとかやってましたが身長がグングン伸びてきて、ピッチングの感覚がバラバラだった。ホームへの距離感がつかめなくて酷いノーコンで（笑）」

平「少し分けてほしかった（現在の松浦の身長は189cm平野は170cm）」

伊「高校時代について聞きますが、緑ヶ原高校に進学した理由は何でしたか」

松「近いからです」

平「同じく」

伊「えっ、それだけですか」

松「スカウトとか来る選手じゃありませんでしたから。野球を職業にしたいというのもなく、ただ好きだから、楽しいから野球をやっているというだけでした」

平「野球は高校までだろうって思っていました。はっきり言って野球が盛んな高校でもなかったし」

伊「意識が変わったのはいつでしたか」

松「高校2年生の夏ですね。その頃は控えピッチャーでしたが、メインだった先輩が前の試合で怪我をして僕が登板する事になったんです」

平「しかも相手がその時甲子園に出場した広耀高校で、ピッチャーには今大学で活躍している都河大和さんで」

松「どう見ても敵う相手ではないので逆に力が抜けたというか、あの頃の実力からすると完全に出来すぎなピッチングでした。試合は」
伊「そのピッチングからスカウトの注目を集める存在となったわけですね」

松「ある球団のスカウトさんが雑誌で僕を都河さんより上のランクなんて書いてくださり、その秋からはスカウト的な人が増えてきて、

でも実際自分にはそんな実力はないけどスカウトの人をがっかりさせたくない。僕が本格的に練習を始めたのはその頃からでした」

イ「平野投手の高校時代はどんな選手生活でしたか」

平「とりあえず投手で。でも身長があまり伸びなかったしココロみたいなストレートはなかった。そこで打たれにくいフォームを研究しました。特に和谷投手の。和谷投手は来季からアメリカに行くそうですが、一番好きな選手だしきっと成功すると信じています」

松「アンダースローになったりナックルボール投げたり、いつも研究をしていた」

平「サイドスローにしたのは2年の秋。何かしつくり来たというか、最初投げてみると上から投げるよりもストレートが伸びてきたので。それに変化球も曲がりやすくなった」

松「元々揺れる球だったけどサイドにしてからは威力があって大きく揺れる球になったという印象。打撃練習では全然打てなかった」

平「だから評判悪かった。フリーバッティングなのに全然打てないからと。でも僕の場合はそれを狙ってやったから」

松「ああ、やっぱりわざとか。『もっと打ちやすい球を投げろ』って言うのと打ちにくい球投げてたよね」

平「まあ、性格悪いから。今更ながらごめんなさいと謝罪しますが、僕もあんな身長でもプロを狙っていた。松浦を見るスカウト振り向かせようと手抜きをしたくなかった」

高校3年時、大連は松浦を単独1位指名する。それまでは広島に隠れた好投手ありと密かに流れる程度の知名度しかなかった男が一躍全国区に登りつめた瞬間であった。一方平野はその年の育成枠で入団。待遇は異なれど同じ大連であった。

イ「そして高校3年生のドラフトとなりますが、松浦投手は1位指名でした」

松「驚きしかありませんでした。熱心だったのは京城と福岡で、3

位や4位であるかという話は聞いていました。自分としては広島だったらいなとぼんやり思っていました。が本当の所はどこに何位で指名されても行くつもりでした。もちろん1位なんて思ってもいませんでした」

平「授業中に野球部の監督だった辻先生が血相を変えて『おい、松浦お前1位だぞ』って飛び込んできて。最初は何の話か分からなかった」

松「辻先生はそういうジョークは言わないタイプでした。でも嘘や冗談だと思った。でもインターネットで確認したら大連1位指名の欄に『松浦心 投手 緑ヶ原高校』ってあってやっと信じました」

平「それからマスコミの人が来てヤラセ撮影した（笑）。授業中に辻先生が来て『大連1位指名松浦』って言ったら僕らがワーって大騒ぎして（笑）」

松「それから会見もしましたが全然考えてなかったので困った（笑）。『大連の印象は、港です』とかちゃらんぽらんな事言ってた（笑）」

平「正直うらやましかったり悔しかったりはあった。でもこれでドラフトは終わりじゃない。秋に向けて頑張ろうと誓った」

伊「平野投手は秋に育成枠で松浦投手と同じ大連入団が決まりました」

平「ココロンが指名されてからは色々な感情が出てきて大変だった、と今なら言えます。指名されてなかったらどうなってたか、ちょっと考えたくない」

松「それまでに増してフォームが独特になったよね。ちょうど鳥が羽ばたくような感じで派手だったのとか」

平「あのフォームはあまりコントロールがつかなかったのですぐやめた。ストレートの威力よりもっと丁寧なところを求めていった」

伊「そして去年がプロ1年目でしたがプロはどう感じましたか」

松「きつかったですね。体力も技術もないけど期待されているのは。夏場まではずっと走っていた記憶しかありません」

平「ただいきなりきつくしごかれたお陰でかなり体力がついた。フォームの軸が安定したのが大きかった」

イ「そして松浦投手は7月28日に二軍で初登板。7試合で3勝1敗防御率2点台となかなかのピッチングを披露しました」

松「高校時代は10球中2球程度だったいい球を5球は投げられるようになったのが夏頃でした。城下（淳之）コーチからは『自分の武器で勝負しろ。逃げるな』と励まされて、基本的にはストレートで押すピッチングでした。秋のキャンプで盧光重コーチからスライダーを教わりましたが、それまでは本当にストレートぐらいしか知らなくて」

平「僕はその頃フォームについて色々試行錯誤していて、大分形が見えてきたところでした。二軍での登板は確か3試合ぐらいだったはず」

イ「その通り、3試合3イニングで2失点でした」

平「9月には今のフォームでいこうとなりましたが、足腰でしっかりと自分の体を支えられないといけないので秋季キャンプやオフはずっと走りこみでしたね。これもトレーナーの陳遠朋さんがメニューを作成してくださったので実行すると確かに強くなりました」

松「もう高校時代のズボンはいらないからね」

平「元々打ちにくい球を投げているのもっとひねくれよう、もっと嫌らしいフォームになろうと常に考えています。来季はまた違うフォームになっているかも知れません」

2年目にしてブレイクを果たした彼らだが、真のプロ野球人生はむしろこれから始まる。来季は何を目標にするのか、そしてこれからはどのような姿を目指すのかを最後に尋ねてみた。

イ「来季の目標はどのようなものでしょうか」

松「まずは1年戦い抜く事が大事です。もちろん防御率や勝ち星といった数字は今年以上なのはありますが、体力をつけてイニン

グ数を伸ばしたいですね。規定投球回数まで投げたという事はそれだけ信頼できるという事なので」

平「僕も信頼という面は大事に思っています。今の大連は抑えが比山さん、セツトアッパーにも野藤さんや小松原さんがいる。その中で自分という存在をアピールするには課せられた仕事をきっちりこなすしかない。特に左打者には打たれたくないですね」

イ「最後に、来季に向けて一言お願いします。」

松「大連の目標は連覇です。これに向かって僕にやれる事なら何でもやっていきたい。先発なら規定到達で2桁、防御率も今季の2.40より良くしていきたい。研究される中でどれだけやれるかで真価が問われると思いますが、必ず勝って見せますので、ファンの皆様は来年も大連をよろしく願います」

平「言いたい事は大体言われましたが、スタジアムでの声援が僕らの力になるので、来年も暖かい声援を私たちに届けてくださると幸いです」

退団選手動向

新たに来る選手がいれば今季限りでチームを離れる選手がいるのもまたプロフェッショナルの必然である。大連を今季限りで退団した全15選手の現時点における動向をまとめた。新天地での活躍を期待したい。

原克馬投手（34）

福岡出身で台湾の鉦昌大を経て大田に入団、千葉を経て6年前に大連入団。リリーフメインだが先発もこなし重宝された。今季は3試合の登板と不完全燃焼に終わったが吉林に入団が決定。復活を目指す。

北甲大投手（32）

スピードはないものの丁寧なピッチングで相手の打ち気を逸らすのが得意な投手。大型トレードで近堂とともに台南に移籍が決定した。使う場所を選ばないタイプの投手なので新天地でも活躍の機会は多いだろう。

小林孝司投手（25）

独立リーグ新潟から育成枠で入団し、スリークォーターからキレのいいストレートを武器に支配下登録を勝ち取った。しかし一軍では3試合で防御率9・00と通用せず。来季からは独立リーグ新潟に復帰する。

李衛孝投手（28）

191cmの長身から投げ下ろされる最速153キロのストレートは威力十分で将来の先発候補として期待されたが大連では大成せず。しかしチチハルが新たなチャンスを彼に与えた。制球難を克服すれ

ば面白い。

岡田正見投手（27）

伸びやかなストリートと多彩な変化球が武器の左腕。高卒で入団して5年目の終盤、先発で2勝を上げて大器を予感させたがそれ以降は伸び悩んだ。来季からは故郷に近い横浜で打撃投手を務める。

白巖承投手（20）

175cmと身長はやや低いが、どっしりと腰を落とした安定感の高いフォームから質のいいストリートを繰り出す右腕。来季は宮口へ武者修行に出る。

鈴木常惟捕手（29）

強肩に定評のある捕手で、長らく大連の2番手3番手捕手として一軍に帯同してきた。今季は金重男の入団や中西ら若手の台頭で一軍出場がなかった。しかしその実力は捨てがたく京城に拾われた。

近堂貴久内野手（29）

大洋大から即戦力のセカンドとして活躍。一時期不調に陥ったものの今季復活。高い打撃力と堅実な守備が魅力的だった。シーズンオフ、大型トレードで北とともに台南に移籍した。大連としても断腸の思いだった。新天地での更なる飛躍を期待したい。

王長映内野手（24）

ショート守備は超高校級と言われていたが怪我が多くその実力をフルに発揮できなかった。自身のブログで合同トライアウトを受験せず引退すると表明。現在は大連市内の一般企業で働いている模様。

陳久利内野手（23）

大阪から合同トライアウトを経て今季から大連に入団したがアピ

ルできず。今季も合同トライアウトを受験したが声がかからず、現在はハルビン市内にあるIT企業で働いている。長打力は魅力的だったがミートに難があったのが惜しい。

クラウド・ノーリー外野手（36）

まさに万能選手、チーム事情により毎年のようにポジションが変わったがすべてそつなくこなしてきた。今季は衰えを見せたが控えとしてチームを支え、東洋一を花道に引退。大連の二軍守備走塁コーチに就任した。

カルロス・アンジェロ外野手（28）

シーズン途中に入団し、持ち前のパワフルなプレーでレフトに定着、東洋一に貢献した。球団は契約延長を申し出たが本人にアメリカ球界復帰の意思が固く国際トレードでウィスコンシンに移籍。

高遼二外野手（27）

俊足に堅実な守備力を兼ね備えた外野手。その守備力は大連最強の呼び声も高かった。しかし打撃が足を引っ張りスタメンには定着できず、もっぱら守備要員として起用された。外野手を求めている光州へ金銭トレードで移籍。

剣持純平外野手（30）

社会人屈指の俊足でポスト三浦修吾の筆頭と言われた。2年目には2番レフトで開幕スタメンに名を連ねるなど期待されていたが怪我で大成できず。来季からは大連の球団職員に就任が決定している。

染恒規外野手（19）

長打力が魅力の外野手。2年目となる来季は白とともに営口へ武者修行に出る。技術全体を磨きたい。

首脳陣の横顔

大連首脳陣一覧 年齢は今年の4月1日時点

オーナー 村上忠芳 64歳

幸波グループ創業者であり大連バトルシップス初代オーナーである村上好寿の長男で現幸波グループのトップ。後継者は長男の智彦（40）が最有力と言われているが次男の之彦（38）を推すグループもいる。

社長 森田正毅 63歳

現役時代は長らく「ミスターサチナミ」の強打者として活躍してきたが現役晩年に大連がプロ化、ギリギリでプロに間に合った。引退以降もチームの中枢で働き6年前に社長就任。元選手なのでプロ野球の実情を知悉しているのが強み。

GM 鹿取奉善 42歳

名門純国大学の2番手投手として大連に入団したが怪我と球威不足のため現役はわずか4年。打撃投手、スコアラーなどを経て39歳でGMに就任した。理論派だが大胆に動く勇氣も兼ね備えている。今年には松浦、赤坂ら若手の台頭やシーズン途中にトレードで獲得したドラグノフ、池田の活躍など見る目の確かさが証明された。

74 監督 劉瑞生 48歳

現役時代は移籍を繰り返す捕手だった。晩年は大連に加入して優勝に貢献。その後各地でコーチを務め、2年前に大連の監督に就任。情熱的な兄貴分としての顔と理論的な指導者としての顔を併せ持つ。就任2年目にして大連を初の東洋一に導いた。

89 投手コーチ 天沼智久 43歳

吉野に大連のエースの座をあっさり譲って引退した後、コーチとして再び一軍に戻ってきた。その吉野を中心とする強力な先発ローテーションを築き上げた。確かな理論と豊富な投手経験で選手からの信頼は厚い。

79 投手コーチ 郭星源 46歳

ブルペン担当としてリリーフ陣の整備に成功した。現役時代から理論派として知られており、選手たちに多彩な知識を提供している。劉監督が連れてきたコーチの1人だが今やチームに不可欠な存在となっている。

86 打撃コーチ 潘一鶴 56歳

チームの初代4番でミスター大連と呼べるほどの人物。自ら「打撃コーチが天職」と語るように指導力抜群。確かな理論に基づく情熱的な指導によって数々の実力派バッターを育て上げた。チームの実質的なヘッドコーチとして劉監督からも信頼を寄せられている。

84 打撃コーチ 田所路雄 44歳

平壤から大連に移籍して前回の優勝に貢献した。引退後は評論家として活動していたが今季6年ぶりにユニフォームに袖を通した。現役時代同様の粘り強い打撃指導で棚橋、大上ら若手を後押し。

88 守備走塁コーチ 小早敷俊悟 50歳

現役時代は大連の切り込み隊長として相手から恐れられたが、今は大連の鬼軍曹として選手たちから恐れられている。練習時に彼の大声が響くのは大連の名物となっている。ノックの技術はチーム1と名高い。

78 守備走塁コーチ 楊光成 43歳

外野手の守備走塁指導ならお手の物。真面目な性格で、選手のためならとことん付き合っって熱心な指導を行うことで知られる。三塁ベースコーチとしての大胆かつ的確な判断にも注目。

77 バッテリーコーチ 貝尾常彦 40歳

選手としては一軍で6試合しか出場していない。長年ブルペンキャッチャーを務めて今年から一軍コーチとなった。誠実で明るい性格をしており、選手たちの兄貴分として慕われている。首脳陣と選手の潤滑油的存在。

85 二軍監督 王良福 48歳

チーム草創期には「良ちゃん」とマスコットの可愛がられたがその後実力も成長し長距離砲として活躍した。一時期は解説者に転身したがその後チームに復帰し、打撃コーチを経て昨年から二軍監督に。誰からも愛される性格で若手選手の父親代わりとなり大きく成長させる。

75 二軍投手コーチ 城下淳之 38歳

前回優勝時はストッパーとして活躍したがその後は故障を繰り返した短い現役生活となってしまう。技術的指導もさることながらみずからの経験を生かした選手の精神的ケアにも尽力する。

87 二軍投手コーチ 盧光重 54歳

厳しくも暖かい指導で松浦、平野ら生きのいい若手投手を多く一軍に送り込んだ育成の名人。

82 二軍打撃コーチ 中森吉明 37歳

現役時代は代打男として活躍した。熱血指導で若手の可能性を開く。明るい性格でチームのムードメーカーとしても貴重な存在。

76 二軍打撃コーチ 中島拓 46歳

劉監督が連れてきたコーチの1人で、シャープなバッティングと小技の指導に定評がある理論派。大連OBとは異なる血を注入した事でチームはより強固になった。

83 二軍守備走塁コーチ 藤田克浩 61歳

コーチとしてはチーム最年長の重鎮。現役時代は大連の初代キャプテンとしてチームをまとめた内野手。その後も大連一筋でコーチの他に営業やスカウトも経験した大連バトルシプスの生き字引といえる存在。今季限りでユニフォームを脱ぎ、後任にはノーリリーが就任する。

81 二軍守備走塁コーチ 高橋秀紀 50歳

スカウトを務めるなど豊富な経験から来るアドバイスは説得力十分。現役時代は外野手として安定した守備力と左投手への強さが特徴だった。引退して16年経ってもスリムな体は現役時代と変わらない。

80 二軍バッテリーコーチ 伊勢田亨 39歳

昨年現役を引退して即座にコーチ就任。長年二番手捕手としてチームに貢献してきた。選手からの信頼が厚い好人物。キャッチングのうまさは秀でており、ブルペンに座り投手の投球を受けている場面をよく見かけた。

90 トレーニングコーチ主任 陳遠朋 36歳

大学からトレーニング理論を学び、アメリカ留学経験もある。今までにサッカー、バスケットボール、アイスホッケーなど多彩なスポーツチームのトレーナーとして腕を振るってきた。選手の体調を完璧にチェックした上での確なトレーニング方法を考案する。

91 トレーニングコーチ 五條史樹 29歳

今年からチームに加わった若手コーチだが豊富なトレーニング理論を持ち選手からの信頼は厚い。今季は二軍で怪我人のリハビリと若手の体力強化に尽力した。

首脳陣の横顔（後書き）

2011年も今日限りで終わり。今年1年、私の妄想をインターネット上に垂れ流してきましたがなかなか楽しいものでした。読んでくださった方は何と申し上げましょうか、とりあえずお疲れ様でした。拙い文章、変な展開、よくわからない人物その他いろいろに付き合ってください本当にありがとうございました。

さて、来年の予定ですが、この一連のシリーズは1年限りで終了の予定です。つまり来年の2月まではお話を投稿しますがそれで終わり。その後はまた別の電波を放出しようかと考えています。それでは良いお年を。

新春特別対談 劉監督大いに語る

昨年の大連にとって喜ばしい出来事といえば大連バトルシップスが東洋一に輝いた事である。星渡、赤坂、松浦といった若手選手から林らベテラン選手まで一丸となって勝利へ突き進む姿は勇ましかった。そしてその選手たちを見事にまとめ上げ、監督就任2年目にして球団初の偉業を成し遂げた劉瑞生監督（49）に新春特別インタビューを試みた。同席するのは元大連監督で現在は野球評論家の飯島昇一氏（60）。

インタビュー（以下イ） 明けましておめでとうございます。さて、劉監督にとって昨年はどのような年でしたか

劉瑞生（以下劉） 昨年は皆様に支えられて東洋一に輝くことが出来ました。今年は連覇を狙います。今季も変わらぬご声援をよろしくお願いします

飯島昇一（以下飯） 大連に関わる人間にとっての悲願がついに達成された嬉しい年だったね。劉監督にはありがとうございますといくら

劉 ありがとうございます。ただ昨年は戦力としては正直できすぎでした。大連はまだまだ未熟なチーム。勢いだけでここまで来たのはいいですが、真価が問われるのは今年です

飯 確かに若い選手が多くて活気があるのいいね。昨年の春季キャンプからそういう部分を強く感じていたので、シーズン中勢いよく進めるか停滞するかは監督のさじ加減次第だろうと思っていたが見事だったね

劉 選手たちは若くてもよく考えてやっていますよ。練習にしても試合にしても、自分が特別に何かをしたというのはほとんどなかった。選手起用も潘コーチや天沼コーチが的確な指示をくれたので監督としては楽でした

飯 選手を信頼した起用ができていたから選手もののびと自分のいいところを出せた。監督が目立たず選手が目立つチームはいいチームだよ

劉 そうですね。君臨すれども統治せずではありませんが、監督はあまり注目されないほうがいいとは常々思っているのです。チームの主役は選手ですから、裏で選手を盛り立てるのが僕ら監督コーチの仕事

イ さて、劉監督の現役時代について伺います。頭脳派の捕手として各チームを渡り歩いていました

劉 そういうとちょっとかっこいいですけどね（笑）内実はトレード要員でした。野球選手としてはパワーがなかったのでポジションが取れなかった

イ 大卒で入団した福岡を4年で解雇されて台北へ。この台北で一軍初出場を果たしました

劉 この頃は本当に華奢でねえ。特に打撃が全然駄目だったからよく4年も面倒を見てくれたと感謝していますよ。台北はキャッチャーが3人怪我してお鉢が回ってきたけど使ってみたら意外といけるってなった。相手の苦手をつくタイプのリードは台湾ではあまりやってなかったのです。そこを磨いた

飯 あの頃の野球界は力と力のぶつかり合いという部分が大きかった。特に海洋リーグはそうだったね

劉 自分みたいな選手が生き残るには頭脳を磨くしかなかった。怪我人が戻るとすぐ二軍に戻りましたが、解雇される代わりにトレード要員になるくらいの実績は積んだ

イ この後広島に2年、千葉に2年、北海道に3年と移籍を繰り返しました

劉 リーグが変わったりカンファレンスが変わったりで大変でしたがその分データを多く採取できた。色々な選手とめぐり合ったのは後の野球人生においてもプラスになりました

イ　そしてこれまたトレードで大連に移籍。ここでは正捕手として優勝に貢献しました

劉　もう36歳になってたからレギュラーとかは考えていなかった。大連には打撃のいい程志門さんがいましたが当時の成木監督は僕を多く起用してくれた

飯　そこはもうリードですよ。成木さんは堅実なチーム作りに定評があったから

劉　小技、それにチームバッティングといった堅実に高められる部分でミスをしないようにと意識していました。そして選球眼を磨いて四球でとにかく出塁する。打撃も考えてやらないと出塁すらままなりませんでしたから

飯　でも劉君も監督としてはそういった部分を重視していて成木さんに似ていると感じていた

劉　確かに監督として成木さんのやり方は頭にありました。それだけに（昨年のシーズン開幕直前に死去した）成木さんにこの優勝を見せられなかったのは、心残りです

飯　きつと成木さんも空から見て喜んでいたはずですよ。ドーム球場だとそれも出来なかっただろうけど、大連なら大丈夫

イ　大連では現役で3年、最後の1年はコーチ兼任でした。そして1年専任のコーチを務めた後で退団し、コーチの勉強をしていたそうです

劉　僕は大連にとっていわば外様なのでコーチ兼任の話が来たときは驚きました。しかし自分でも力の衰えは分かっていたしそろそろ次に向けて考えないという時期だったので引き受けました。まあコーチ兼任といってもほとんど試合には出ていなかったので90％は専任のコーチでしたけど

飯　すでに理論はコーチ陣の中でもトップクラスだったね

劉　僕としては外で野球を学びたいと思っていた。なので退団したらまずアメリカに行きました。そこでコーチングやデータ分析など

様々な理論を学びました

飯 ちょうど僕が監督やってた時だね

劉 ええ。その頃はアメリカの試合の解説をしたりコラムを書いたり、評論家みたいな事もしていました。その頃の体験が監督となった今でも基礎として生きています

イ 帰国後、台北のバッテリーコーチに就任しました

劉 理論は実践できないと意味がない。学んだ時にはまさに正しいと思ってもいざやってみると役に立たなかったりする。そういった取捨選択を台北では行いました

イ しかし台北は2年で退団し、吉林に移籍しました

劉 本当は台北でやれるところまでやりたかったけど経営のゴタゴタがあったのでそれに翻弄された感じでしたね。同じ時期に不思議なトレードや戦力外通告がいくつかあったけど大体はそういう理由だった

イ 吉林にも2年いましたが、この時期はどういった事をしていましたか

劉 吉林では二軍監督をしていましたが、ここで郭コーチや中島コーチと出会った。考え方は共通している所があったのですぐに意気投合しました。まさに同志というものでしょうか、今の大連では郭コーチは一軍、中島コーチは二軍を担当していますが僕が3人いるようなものだと思います

イ そして一昨年、大連から一軍監督のオファーが来てそれを受諾しました

劉 吉林二軍でそれなりに実績を上げて自分でもいけるかとも思い始めたところで大連から一軍の監督として来てほしいというオファーがあった。僕としてもいずれは一軍監督をと考えていたし大連は魅力的なチームだったのでその話はすぐに受諾した

イ 大連のこういった点に魅力を感じましたか

劉 非常に若くて優秀な選手たちが揃っている所ですね。飯島さん

や潔原さんの土台作りは完璧だったので、その上で選手たちを戦う集団にしようという一点に集中できた

飯 特に潔原君がいいチームを作ったね。吉野、星渡、柳中平、小松原とみんな潔原時代に出てきた選手だから

劉 本当にそれはありがたいことでした。足りないのは経験だけでしたから。当時は鳥内（現平壤）が抜けてからショートが固まっていまませんでした。適任な人材がいた

飯 棚橋君の事かい

劉 そう。恵まれた体格と野球センスがありますからね。パワーも技術もあって足も速い。それなのに二軍でくすぶっていた

飯 メンタル面というか、気弱なところが足を引っ張っていた感じがする

劉 その通りで、とにかく自信をつけさせたかった。これは棚橋だけでなく他の若手に関してもね。若い選手は使っていけば学び、その素質が磨かれて開花するもの。だから試合で使い続けるようにした飯 比山もそうだけど、シーズン序盤と終盤では顔つきが変わっていたね

劉 ポテンシャルのある選手だから、信頼して力を伸ばす事が大事だと考えていた。監督やコーチがあれこれやらせるより自分の力で伸びてほしかった。棚橋も比山も赤坂も松浦もみんなそうして伸びてくれた

イ 今季の選手起用に関してはどうでしたか。まずは投手、若い選手が期待通りに出てきたように思えますが

劉 赤坂君は人材豊富と言われた去年のドラフトでも屈指の素材だった。この選手を獲得できた時は「来年の先発陣はまったく様変わりするぞ」と確信した

飯 去年から引き続き先発ローテーションで投げたのは吉野君と張尊君ぐらいだろう。エスターリンは退団して、伊東君や北君はリリーフに回って

劉 若い選手をまず立てて、伊東や北といった経験豊富な投手にフ
ォローさせるようにと考えていた。赤坂や松浦には堂々と投げて来
い、自分の実力を観客に晒すようにと常に言ってきました。失敗し
てもリリーフ陣が支えてくれるから、と。いきなり2人とも10勝
したのは出来すぎとも言えるけど、本人たちがよく力を見せてくれた
飯 リリーフも安定していたよね。特定の選手に無理をさせないよ
うによく回っていた

劉 それまではよく「層が薄い」「毎年とっかえひっかえ」などと
言われていましたが実際はそこまで層は薄くなかった。飯島さんの
言うように負担がかからないようにという点はシーズン中常に考え
ていた。野藤はそこでもかなり便利に使ってしまったけど、あの
タフネスをみんな持っているわけではないからね

イ 野手では、捕手は清水選手と金重男選手の2人をうまく併用し
ていました

劉 捕手としての実力は清水のほうが上、でも打者としては金に軍
配が上がる。金が打撃において本来の実力を発揮できたら併用にな
るだろうとは予測していた

飯 3番手として中西も少し出ていたけど、将来はどうなるかね

劉 若い選手はキャンプごとシーズンごとに伸びていくものなので
現時点では何もいえない。今の2人はとりあえず最低でもあと3年
は頑張ってくれるでしょう。その時に誰がどれだけ力をつけている
か、僕に使いたいと思わせるかが大事

イ 一塁手は柳選手がメインでしたが怪我した時は古池選手やシー
ズン途中に獲得したドラグノフ選手がよく穴を埋めていました
飯 ドラグノフ君はまさに環境が変わることで飛躍した選手だった
ね。解説者として色々なチームを見て回ったけどこういう選手はま
だまだ多いように思える

劉 身体能力は言うまでもないとして、ドラグノフの場合はイメー
ジ以上に器用な技術も持っていた。いや、むしろ遠くに飛ばすより

広角に打ち分ける適性のほうが高いように思えた。ドラグノフはそれまで身体能力を生かして長打をと考えすぎるあまりもろかったけど、少し考え方を変えただけで柔軟性も出てきた

飯 古池君は代打としても良く働いてくれたね

劉 柳は4打席で結果を出すタイプ、古池は1打席でも結果を出せるタイプ。そういった見極めも大事になる

イ そして二塁手は近堂選手の復活と大上選手の台頭がありました
劉 近堂の復活は想定内だったけど大上は想定外だったと正直に告白します

飯 大上君の場合俊足というわかりやすい武器があって、それが一軍の足がかりとなっていたけどあそこまで打てる選手とは思わなかった

劉 ええ。ですからシーズンの中盤までは代走メインでした。それがノーリリー、近堂、本郷と怪我人が相次いだので使うしかないとなったらチームのバランスも良くなって

飯 近堂君が復帰したらサードに回っていたけど、ここも意外と難しいにこなせてたしね

劉 ここまで引き出しの多い選手とは思っていなかった。あるいは去年の大連最大の収穫だったかも知れません。大上徳博という存在だけでチームの柔軟性が飛躍的に上がりましたから

イ そしてオフには近堂選手がトレードで移籍しました

劉 本当は今年も主力として期待していた。まさに断腸の思い。詳しい事情は鹿取GMが知っている部分でしょうから自分があれこれ言う問題ではない

飯 大連はここ数年レフトが定まっていなかったから呉清元を獲得したという考えは正しいと思う

劉 それはその通り。呉はいい意味でのふてぶてしさというか、不動心を持っている。大連は若い選手が多いのでそういった選手たちの軸となってくれるでしょう

飯 ちょうど前回優勝時の田所君（現大連打撃コーチ）の役割にな

れそうだね。それに草原君もいいよ。僕はこの選手をかなり買っている

劉 若くてボールに威力のある左腕で、本来ならトレードでは流れないほどの素質を持っている。この選手も鍛えたらかなり面白くなりそうですね

イ さて、今年の目標は連覇という事ですが勝算はありますか

劉 それを語るにはまだ早いとは思いますが、結局は選手ありきですからね。選手が伸びてくれたら連覇してくれるでしょう

飯 計算できるのは投手ではまず吉野君、野手では林君に星渡君あたりかな

劉 それにパウロのパワーも計算しています。去年のシーズンは野手に関して、1番星渡4番林5番パウロを軸に考えた。3番棚橋は育成のつもりで使い続けたらしっかり軸になってくれた。でもまだ1年やっただけ、計算に加えるには早すぎる

飯 だね。とりあえず今年もやってくれて、来年もやって初めてポジション確保と言える

劉 年齢的にはポスト林も考えないといけない

飯 まあ外野は水内君、河剛紀君、李健太郎君と面白そうな若手が多いから競い合わせればいい選手が出てくるだろうけどね

劉 大連はまだ未完成のチーム。これから変化し続けていくだろうし、変化しないと連覇はできない。幸い若い選手が多いので伸びしろは大きい。勝利は選手によってもたらされるのだから、応援してくださるファンに勝利という最高の形で報いるために、今年も最大限の努力を続けていきます

飯 僕も解説者として、より多くの方々に野球の面白さ、奥深さを伝えるために今年は一層励みたいね。その上で大連に優勝してもらったらもう最高なんだけどね

劉 期待に沿えるようにがんばりますよ

新春特別対談 劉監督大いに語る（後書き）

明けましておめでとうございます。2012年もよろしく願います。

V戦士インタビュー 林葉輔

昨年は大連の4番として打率・347に20本塁打106打点という成績で首位打者と打点王の二冠、そしてMVPを受賞しチームは東洋一と最高のシーズンを送った林。現役21年目にして今がピークと言えるような大活躍だった。今年40歳を迎えるがまだまだ衰えを見せない球界の至宝は今年をどのように迎えるのか。

インタビュアー（以下イ）「昨年は素晴らしい活躍でした」

林「ありがとうございます。まあ、去年はね、チームの勢いに釣られて気付いたらああいう成績だったという感じでしたね」

イ「むしろ林選手が若手の多いチームを引っ張って、それに触発されて若手が伸びたという印象でした」

林「そうですね。まあ、いずれにしろ若い選手が出てくるのはいい事です。僕ももういい年ですし僕がいなくても大丈夫ってなるぐらいでないかね」

イ「しかし実際問題林選手の成績は抜群なので今年も林選手が中心となるでしょう」

林「まあ、若い選手が伸びるのは刺激になるし、星渡君や棚橋君がもっともっと出てきたらそれがチームにとって一番いいことだよ」

イ「それにしても、昨年首位打者、打点の二冠に加えMVPまで獲得しましたが、ここまでの成績を残した要因は何だったのでしょうか」

林「まあ色々あるけどね。普通は長くやる事で技術を覚えるけど肉体が衰えるのでせっかく覚えた技術や感覚をフルに使えなくなる。でも去年は体がよく動いたので技術をよく発揮できたのが大きかった」

イ「体が動いたのはなぜでしょうか」

林「去年から新しく古武術を取り入れたストレッチをしているけど、

これが僕にとっては良かったのかも知れない。それに若い選手が出てきて順位も良かったから精神的に張りが出たってのもね。どれかひとつが正しいという話でもないし曖昧になるけど」

林は兄の背中を追って野球を始めた。高校時代、甲子園に3回出場して実力派スラッガーと注目されるようになったが、その瞳には常に兄の背中が映っていたという。

イ「では、林選手のプロ入り以前の話を伺いますが、野球を始めたのはいつでしたか」

林「小学3年生の時でしたね。年が1歳上の兄が野球部に入っていたので僕もという感じで。兄は右だったけどじゃあ僕はその逆でという事で左にしました」

イ「生まれつきの左利きではなくてそういう理由があったのですか」

林「まあ、ね（笑）。字を書くのも箸を持つのも右で、左利きなのは野球関係ぐらいいですよ。野球部の練習に最初は左のグローブだったけど、ある時どうしてもグローブが見つからなくて仕方なく右のグローブで練習した事もあった。それぐらいいちゃらんぽらんでしたから」

イ「小学時代のポジションはどこでしたか」

林「最初の2年は控えでしたね。兄はもう外野手でスタメンだった。兄みたいに試合に出たいと思って練習していました」

イ「林選手にとって兄は憧れのプレイヤーだったわけですね」

林「今でもそうですよ。兄は僕より野球がうまいって今でも思っているし尊敬している。で、僕は5年の時にライトになった。打順は8番ですね」

イ「選手としてはどうでしたか」

林「まあプロなんて夢のまた夢のまた夢って感じでしたね。ほとんどヒットは打てなくて。ただ四球は多かったからそれなりに使って

もらえたんでしょね」

マイペースな野球人生を送っていた林だが転機が訪れたのは冠崎高校に進学してから。林の入学と前後するように急激に力をつけてきた同校は林が2年生の時のセンバツ準優勝、続く夏の甲子園では全国制覇と「冠崎旋風」を巻き起こし、クリーンナップとして活躍する林の長打力に注目が集まった。

イ「選手としてプロから注目され始めたのはいつからでしたか」

林「これはもうはつきりしていて高校からですよ。もっと具体的に言うと高校1年から2年に変わるとき、春のセンバツで活躍したからです」

イ「圧倒的な打撃力をバックにセンバツは準優勝となり冠崎旋風と言われました」

林「その時は5番でした。4番は元京城で今は解説者の生田部（渡海）さんで。1年の秋ぐらいから打球が飛ぶようになったのでスタメンに使われるようになった。今思うと手首の使い方を覚えたのがその時だったね」

イ「当時からポジションは外野手でしたか」

林「そうですね。左投げですから。でも僕は不器用だから仮に右投げでも内野はとでもできなかったと思いますよ。今でもゴロの処理とか不安になりますから」

イ「そしてセンバツの決勝戦で先制となるホームランを打つなど大活躍でした」

林「あの試合はねえ。今でも思い出すことがありますよ。奈良県の日智高校とでしたが実力差は明らかだった。僕がホームランを打てたのはまぐれだったし、チームとしてもそれ以外の得点は取れなかった。でもその悔しさがあったからこそ夏はさらに頑張ろうと思えるようになった」

イ「そして夏は全国制覇を達成しました」

林「その時の1年の一人が立石（篤志）で、立石はいきなり守備も打撃も抜群だった。夏が終わり、生田部さんが引退した後は僕がキャプテンになりました。正直あんまりいいキャプテンじゃなかったと思います」

イ「それはどうしてでしょうか」

林「自分の事ばかりに精一杯だった気がする。チームのことは副キャプテンの竹部（俊次 元社会人PDL電器所属の内野手）にまかせっきりで迷惑をかけました。『背中では引く張る』といういささか我田引水ですが、まあそんな感じで」

イ「プロを志望していましたか」

林「なればなりだったけど指名がなかったら大学でと考えていたので勉強も欠かしませんでしたね。ドラフトでは大連から3位で指名されましたがまったく迷いはありませんでした」

そしてプロ入りした林。当時の大連は、それまでの6年で2度の優勝を果たした森沢監督が退団し、新たに矢尾村監督が就任という時期だった。矢尾村新監督は林の素質に目をつけて一軍で育成を開始、林はそれに応えて一流選手の階段を登っていった。

イ「大連はどのような印象でしたか」

林「あの頃はまだチーム自体がプロになってそんなに間がなくて、加盟したというニュースを僕が何となく覚えてるぐらいでしたから。でも大陸では強いほうと聞いていたし、野球をやるならどこでかは全然なかったし、機会をくれてありがとうございますとしか思っていないませんでしたね」

イ「矢尾村監督はどのような監督でしたか」

林「僕にとってもプロは最初だったのであの頃は何も考えずただ一生懸命頑張っただけでした。ただそういった姿勢が矢尾村監督に気に入られたのかも知れませんね。当時の外野にはレフトに大物打ちの（ウォルター・）デイクソン、センターは松尾（涼）さんで、

ライトは今コーチの高橋（秀紀）さんや永岡（泰範）さんでしたが、僕は割と臍負されて起用されていました」

イ「矢尾村監督は常々『林を育てる事が俺の仕事だ』とおっしゃっていました」

林「その頃はまだ実績もなかったので期待が怖いと感じる事もありました。しかしそのお陰でここまで来たので矢尾村監督には感謝しています」

イ「その起用に応えて初めて規定打席に到達した3年目には優勝を果たしました」

林「でも成績はあんまり良くなかったはず（・254 21 54）。5年目によくタイトルを取って矢尾村監督に報いたかなという所で監督は光州に行きました」

イ「続く松山監督の時代は球団史上初となる最下位を経験するなど苦しい時代を過ごしました」

林「チームが世代交代の時期だったし怪我人も多くてなかなか歯車がかみ合わなかった。松尾さんも確か怪我で1年を棒に振ってましたし。固定されていたのは4番ライトの僕と1番センターの三浦さんぐらいだったはず。打順はそれこそ毎日のように変わって色々試していました」

イ「その中でホームラン王を獲得しました」

林「確かに毎日が嵐のように大変な状況でしたが自分は伸びていたし、その時その時は無駄にしたくないといつも思っていました。そうやって伸びることが出来た結果がタイトルもそうだし今でも現役というところにつながっているはずです」

イ「そして成木監督にバトンタッチします。その2年目には現監督の劉瑞生らベテランが加わり優勝を果たしました」

林「劉監督は1年目からチームの精神的支柱と言いますか、軸になっていた。今もそうですが当時からとにかく選手の心を掌握するのがうまかったですね。何でもわかっているような懐の深さがあって、誰からも信頼されていました」

イ「次の飯島監督が就任した頃から林選手はベテランとして精神的にもチームの中心となっていました」

林「20代まではただ突っ走って行くだけでしたが30代になるとそれだけではいきませんからね。振り返ることも多くなった。でも結局は前進を続けないといけない仕事だから、色々と小さな変革は常にしてきました。古武術もそうだし、トレーニングもウェイトトレーニングを増やしたり食事に気をつけたり。まあ何でもしましたね」

イ「その中で打点王を獲得するなど相変わらずの実力を発揮しました」

林「まあタイトルなんてそういう数字になりましたというだけですからね。若い頃の勢いはもう出せない中でどれだけ自分を高める事が出来るか、自分の全てを出し切る事が出来るかが重要になっていきました」

イ「潔原監督時代に2000本安打を達成しました」

林「そういうのもね、監督に愛されてきたという数字ですよ。でも達成したときは長くやってきたなとは思いましたね。でも自分より年上の生田部さんや小金井さんがまだまだやれている限り自分だつてまだまだこれからとは思ってきました。生田部さんは一昨年引退しましたが、自分はまだやれるしチームが必要と思うまでは現役でやりたい」

かつては30代後半には力が衰えて引退する選手が多かったが現在では40歳を超えても活躍する選手は多い。林もそういった鉄人の列に加わるのだろうか。そして不惑を迎える林に今年にかける意気込みを聞いた。

イ「現在の劉監督になってから若返ったというか、さらに野球選手としてステップアップした印象を受けます」

林「それは潔原監督時代からずっと若くて素質のある選手が出てき

ていい刺激となっているものもあるし、劉監督を胴上げしたというモチベーションもあった。自分のためより人のためとなったほうが力が出る、そんな気がします」

イ「さて、今年に40歳を迎える林選手ですが、今年にかける意気込みを教えてください」

林「気付いたら40という感じですね。不惑と言いますが全然そうなる気配がないですね。まあ、年齢も目安の数字みたいなもの。40歳でも体が動くならスタメンで使われるし動かなくなったら使われなくなるでしょう。そういった部分は劉監督に任せるだけです。ただチームに害をなす前に潔く引退したいですね」

イ「ファンとしては林選手のプレーはずっと見ていたところでしょうから今年も活躍を期待しています」

林「そりゃあね。できる事をやるという姿勢でここまで来だし出来ないことは出来ません。僕の場合は足はないし守備も平凡だから打撃が落ちたらもう終わり。まあそれが逆に目標をクリアーにしている感じもあります」

イ「今季の目標について、具体的な数字はありますか」

林「とりあえず去年の数字ですね。ただ去年は正直できすぎという部分もあったので、打率はとりあえず、280ぐらい、ホームランは2桁に打点は70って所かな。4番ならば打点にはこだわりたい。星渡君とかトップバッターはいいんだし、中軸がしっかり点を取ってあげないともったいない」

イ「今年も4番を守っていきますか」

林「まあ打順は別にいいんですけどね。僕をぶっ飛ばすような選手が出てきたらそれが一番いいですよ。そのときには心置きなく引退できるでしょうね」

イ「最後に、ファンに向けて一言お願いします」

林「長い間応援していただき本当に感謝しています。今年も勝利によってファンを喜ばせたいですね。そして球団史上初となる連覇を目指して頑張りたいです」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7324y/>

バトルシップスよもやま話

2012年1月12日21時54分発行